

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第139集

管波 I 遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

管波 I 遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の管波Ⅰ遺跡は、九戸村西方の折爪岳山麓に立地し、昭和63年の発掘調査によって縄文時代の集落跡や狩り場跡が発見されました。特に段丘の縁辺部に遺構が集中するなど、居住域の占地にみられる特徴は、県北部における集落のあり方を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました九戸村教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村直

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡九戸村大字江刺家第16地割10-2ほかに所在する管波1遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はJ F02-0029であり、遺跡の調査略号はKN I-88である。
3. 本遺跡の発掘調査は、一般国道340号の改良工事に伴い、岩手県教育委員会文化課の調整を経て岩手県土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
4. 野外調査は昭和63年7月21日から8月31日まで500㎡を調査対象として、田鎖壽夫・斎藤邦雄が担当した。室内整理は昭和64年1月4日から平成元年3月31日まで実施し、本報告書の執筆・編集には斎藤邦雄があたった。
5. 石器の石材鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
6. 本報告書作成にあたり、名久井文明、熊谷常正（岩手県立博物館）の両氏から御指導・御助言をいただいた。
7. 野外調査にあたっては、九戸村教育委員会及び道地善之助氏をはじめとする地元の方々の御協力を頂いた。
8. 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。
9. 遺構の埋土観察・出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帳』（小山・竹原：1967）を参考にした。
10. 本報告書に掲載した実測図の凡例については、II. 調査経過及び調査方法等によった。なお、実測図の縮尺については図中にスケールを付した。写真図版の縮尺は不定である。
11. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	2
II. 調査の方法と整理方法	3
1. グリットの設定	3
2. 粗掘り	3
3. 遺構検出と遺構の命名	3
4. 精査と実測	4
5. 写真撮影	4
6. 室内整理	4
III. 遺跡の立地と環境	6
1. 地形と遺跡の立地	6
2. 地質	6
3. 基本層序	6
4. 周辺の遺跡	7
IV. 検出された遺構と遺物	12
1. 竪穴住居跡	12
2. 土坑	17
3. 落とし穴遺構	24
4. 土器埋設遺構	25
V. 遺構外出土遺物	41
1. 土器	41
2. 石器	47
3. 石製品	48
VI. まとめ	59
1. 遺構について	59
2. 遺物について	59

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	11
--------------	----

図 版 目 次

第1図	岩手県図にみる遺跡の位置	1
第2図	遺跡位置図	2
第3図	遺構配置図	5
第4図	基本層序	7
第5図	遺跡周辺の地形図	9
第6図	周辺の遺跡分布図	10
第7図	第1・2号竪穴住居跡	13
第8図	第2号竪穴住居跡出土遺物	14
第9図	第3号竪穴住跡・第3号竪穴住居跡出土遺物(1)	26
第10図	第3号竪穴住居跡出土遺物(2)	27
第11図	第3号竪穴住居跡出土遺物(3)	28
第12図	第3号竪穴住居跡出土遺物(4)	29
第13図	第3号竪穴住居跡出土遺物(5)	30
第14図	第4号竪穴住居跡・第4号竪穴住居跡出土遺物	31
第15図	第51・52・53・54号土坑	32
第16図	第55・56・57・58・61・62号土坑	33
第17図	第59・60・67号土坑	34
第18図	第63・64・65・66・68・69号土坑、落とし穴遺構	35
第19図	落とし穴遺構・土坑内出土遺物(1)	36
第20図	土坑内出土遺物(2)	37
第21図	土坑内出土遺物(3)	38
第22図	土坑内出土遺物(4)	39
第23図	土器埋設遺構・埋設土器	40
第24図	遺構外出土遺物(1)	49
第25図	遺構外出土遺物(2)	50
第26図	遺構外出土遺物(3)	51
第27図	遺構外出土遺物(4)	52
第28図	遺構外出土遺物(5)	53
第29図	遺構外出土遺物(6)	54
第30図	遺構外出土遺物(7)	55

第31圖 遺構外出土遺物(8).....	56
第32圖 遺構外出土遺物(9).....	57
第33圖 遺構外出土遺物(10).....	58

写真図版目次

写真図版 1 調査区遠景・基本層序.....	67
写真図版 2 第1・2号竪穴住居跡.....	68
写真図版 3 第3号竪穴住居跡.....	69
写真図版 4 第4号竪穴住居跡.....	70
写真図版 5 第51・52・53・54号土坑.....	71
写真図版 6 第55・56・57・58・60号土坑.....	72
写真図版 7 第59・61・62・63号土坑.....	73
写真図版 8 第64・65・66・67号土坑.....	74
写真図版 9 第68・69号土坑・落とし穴遺構・土器埋設遺構.....	75
写真図版10 遺構内出土遺物(1).....	76
写真図版11 遺構内出土遺物(2).....	77
写真図版12 遺構内出土遺物(3).....	78
写真図版13 遺構内出土遺物(4).....	79
写真図版14 遺構内出土遺物(5).....	80
写真図版15 遺構内出土遺物(6).....	81
写真図版16 遺構内出土遺物(7)・遺構外出土遺物(1).....	82
写真図版17 遺構外出土遺物(2).....	83
写真図版18 遺構外出土遺物(3).....	84
写真図版19 遺構外出土遺物(4).....	85
写真図版20 遺構外出土遺物(5).....	86
写真図版21 遺構外出土遺物(6).....	87



第2図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

一般国道340号は、陸前高田市から北上山地を縦断して八戸市に至る総延長212.97kmの主要幹線道であり、軽米町・九戸村においては基幹となる最重要路線である。九戸村管波地区においては幅員狭少、線形不良であることから、同村大字江刺家第15地割字道地87から同第17地割字丸木橋54—11までの延長1.12km、幅員11mの改良工事が昭和62年に着手され、平成3年に完成の予定である。

これにかかわる埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県土木部、二戸土木事務所と岩手県教育委員会との間で協議がなされ、改良工事に関連する遺跡の分布調査は昭和60年12月3日付け「土第1334号」による調査の依頼を受けた県教育委員会文化課が昭和60年12月23・24日に実施した。さらに協議を重ね、同61年11月7・8日に現地確認を行い、管波I遺跡、葉ノ木沢遺跡、丸木橋遺跡の3遺跡について事前の発掘調査を実施することとした。

これにより管波I遺跡については、昭和62年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に組み入れられ、昭和63年7月8日付け委託契約により調査に着手することとなった。

II. 調査方法と整理方法

1. グリットの設定 (第3図)

調査区域は500㎡と非常に狭小な範囲である。二戸土木事務所が測量した中心杭を基準として、調査区のほぼ中央部を通るように南北に中心軸を設定し、調査区全域を網羅するように5m×5mのメッシュを組んだ。グリットの命名は北西端を原点として、南側へは大文字のアルファベットA・B…、西側へはローマ数字のI・II…を付し、これを組み合わせA I・B II…というようにグリットを表現した。南北の中心軸は正確な磁北を表現しておらず、約9度西側に偏している。

2. 掘り

すべて手作業で実施した。排土の場所が確保できないため、当初は調査区の北半から調査を進め、精査完了時点で北半地域を排土の場所として逐次南半分の調査を実施した。

3. 遺構検出と遺構の命名

大部分の遺構は表土を除去した段階、他の遺構はII層下面～III層上面の段階で検出された。検出された遺構には、検出順に下記の要領で遺構名を付した。

竪穴住居跡 1～ 土坑類 51～ 落とし穴遺構 101～ 土器埋設遺構 No. 1～

4. 精査と実測

竪穴住居跡、土坑類、落とし穴遺構とも2分法で精査を実施した。遺構実測図は20分の1の縮尺、地形測量は100分の1の縮尺で実測を行った。埋土の土層は、上位から順に算用数字を用いて表現した。また、基本層序についてはローマ数字を用いて表現した。

5. 写真撮影

現場での写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7cmのモノクロ1台を使用した。

6. 室内整理

遺物の処理は水洗とラベルの記入を行い、種類毎に仕分け・接合復元・実測・トレース・拓本・写真撮影の順に作業を実施した。遺構図版は第1原因の点検・修正・合成の後、第2原因を作製し、トレース・図版作製の順に進めた。遺構図版の縮尺は、40分の1の縮尺で掲載した。図版中の隙はアルファベットのG、小穴・柱穴はP₁・P₂…で図示している。

遺物図版は、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物を分離し、可能な限り器種別に掲載するよう配慮した。縮尺は、土器・土器拓影図・礫石器が3分の1、剥片石器・土製品・石製品は2分の1を原則としたが、器種の大小に応じて一部縮尺を変えて掲載している。なお、図中にスケールを付してある。図版中のスクリーントーンは下記の内容を示すものである。

写真図版のなかで遺構写真の縮尺は不定である。遺物写真については、大型の復元土器は6分の1、土器破片は3分の1、礫石器は3分の1、剥片石器は原寸あるいは2分の1を基本としている。なお、遺物の実測図番号と写真図版に付された番号は同一のものを指している。



掲載図版凡例

III. 遺跡の立地と環境

1. 地形と遺跡の立地 (第1・2・5図)

管波I遺跡は、岩手県九戸村江刺家地内にあり、折爪岳東方約2.5kmのところに位置している。本村は、岩手県北部北上山地の最北端に位置している。本村を含む周辺地域は、北上山地の比較的高い山岳が南北に連なり起伏に富んだ複雑な地形を呈しているが、概して標高300m前後の丘陵地が各地にみられ緩やかな傾斜地が多い。本村は南北に長く、西方には折爪岳(852m)、小倉岳(652m)、傾城峠(736m)などの急傾斜をなす山脚部がほぼ南北に直線状に延びている。東方には、山形村の明神岳と多々良山の中間に源を発する瀬月内川が北流している。瀬月内川は、小さな屈曲をみせるものの折爪岳山脚部と並行するように南北に水系を保ち軽米町大島付近で雪谷川と合流している。一方、瀬月内川の東方には北上山地の古い隆起準平原の名残りである起伏量の小さな山地が広がっている。

管波I遺跡の所在する地域は、折爪岳山麓座錐扇状地の先端部分に相当し、北流する瀬月内川によって形成された標高230~240mの低位段丘上にある。遺跡を含む周辺の現況は、水田及び畑地となっている。なお、瀬月内川を挟んだ東岸台地上には葉ノ木沢遺跡が位置している。

2. 地質

遺跡の載る地形面を構成する地層は、扇状地堆積物と十和田火山起源の火山砕屑物によって構成されている。扇状地の基盤は砂岩と粘板岩が主体をなしており、この上位に礫混じり砂質土・礫混じり粘性土・有機質土・軽石質火山灰が互層をなして扇状地堆積物を構成している。これらの堆積物に含まれる礫は、ほとんどがチャート・粘板岩質チャート・粘板岩・石灰岩の亜角礫である。これらの扇状地堆積物の上位に以下に記す層が堆積している。

3. 基本層序 (第4図)

調査区域内では、基本的には左図に示すような層序が観察されるが、部分的には後世の攪乱・土砂の移動のために層序が乱れている所もある。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

第I層 黒色土 (7.5Y R2/1) シルト 耕作土であり調査区全域に認められるが、斜面上方南半では薄く、北東斜面に向かうにつれ漸次層厚を増す。層厚20~30cmで、調査区北端ではやや層厚を増しており、この部分が沢の部分に相当する。縄文時代後期の遺物が出土しており、遺構の多くはこの下位の面で検出されている。

第II層 暗褐色土 (7.5Y R3/3) 砂質シルト 中礫浮石層に相当する。黄褐色浮石粒を多量に含む。第I層の黒色土との混土層を成しているが、下位ほど中礫浮石が多くなり明度を増している。この層からは縄文時代早期及び前期の遺物が出土しているが、斜面上方からの土壌の移動により形成された部分もあり、必ずしも遺物の出土は明確な層位は示していない。

第Ⅲ層 明褐色土 (7.5Y R5/8) 南部浮石層で層厚は20~30cm 0 M

あり、凹凸が顕著である。調査区北端では流失している。

第Ⅳ層 褐色土~黄褐色土 八戸火山灰に相当する。下位ほど
グライ化が進行している。層厚100~130cm。

第Ⅴ 段丘礫層

4. 周辺の遺跡 (第6図)

現在までに村内において、分布調査などにより遺跡の存在が確認されているのは50数箇所に及ぶ。そのなかで、調査によって遺跡の概略が把握されているのは、本年度当センターが調査した葉ノ木沢遺跡・管波Ⅰ遺跡を含めると17箇所を数える。

遺跡の分布状況を概観すると、その多くは瀬月内川沿いに分布している。なかでも9割以上の遺跡が瀬月内川左岸の折爪岳山脚部の緩斜面上に立地している。これらのほとんどは緩やかな丘陵地が発達している江刺家・伊保内・山根地区に集中する傾向がみられる。

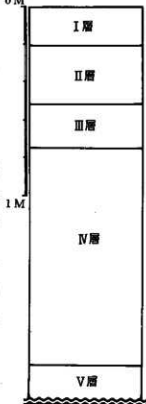
先学の研究によると、低位段丘相当の台地上(標高250~280m)には縄文時代早期~中期・奈良時代・平安時代・中世の遺跡が、中位丘陵地状地形面(標高280~350m)上には縄文時代後期・晩期の遺跡が多く立地する傾向にあることが指摘され、更に遺跡の立地傾向が湧水の分布と強く結びついていることが明らかにされている。

調査された遺跡を通観すると、縄文時代早期では竪穴住居跡などの遺構は検出されていないが、嶽Ⅱ・江刺家・田代・伊保内Ⅰa遺跡において貝殻・沈線文系の土器が発見されており、少なからず人間の活動の痕跡をうかがい知ることができる。

縄文時代前期では、田代遺跡から円筒下層d式期に相当する竪穴住居跡が1棟検出されているのみで、他の数遺跡からは前期後半を中心とする遺物が発見されている。江刺家Ⅳ遺跡では、本遺跡から出土している縄文時代前期の土器と時期的に近いと思われる羽状縄文の施文された尖底の深鉢形土器が発見されている。

縄文時代中期になると、遺跡の質・量とも前時期に比較して急激に増加の傾向をみせる。7遺跡から40数棟の竪穴住居跡が検出されている。特に、田代遺跡では縄文時代中期における大木式土器文化圏と円筒土器文化圏の接触・交替の動態を示す好資料が発見されている。

縄文時代後期では、遺跡数では前時期とあまり隔たりがないものの遺構数では減少傾向にあ



第4図 基本土層

る。しかし、滝谷Ⅲ遺跡では11棟の後期前葉の竪穴住居跡が検出されている。

縄文時代晩期になると、前時期と比較して遺跡数・遺構数とも横ばい状態である。6遺跡から10数棟の竪穴住居跡が検出されており、そのほとんどは晩期前半期に属するものである。

弥生時代に入ると、以前の縄文時代と比べ遺跡の質・量とも激減する。僅かに塚Ⅱ遺跡で、磨り消し縄文・平行沈線文・鋸歯状沈線文の施文された土器が発見されているのみである。

村内では土師器が発見される遺跡は数多く知られているが、調査によって奈良時代のものであると確認されている遺構は、田代遺跡から検出されている竪穴住居跡1棟のみである。栗開式～国分寺下層式の時期が想定されており、ほぼ8世紀代の竪穴住居跡と思われる。

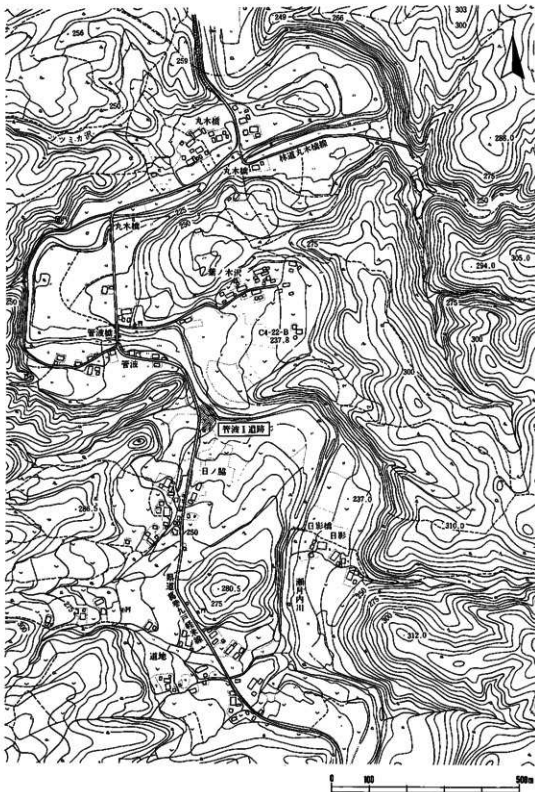
平安時代では、遺跡の質・量とも奈良時代に比較して急激に増加の兆しを見せる。江刺家遺跡では32棟の竪穴住居跡が検出されており、大規模な集落が営まれていたことが明らかにされている。

中世に入ると、現在までのところ村内では17箇所の中世館跡が確認されている。開田等により破壊を受けた遺跡もあるが、多くの館跡では堀・土塁などの付属施設が残されている。このなかで、伊保内Ⅰb遺跡の調査では伊保内館に付随する堀跡の一部が検出されている。

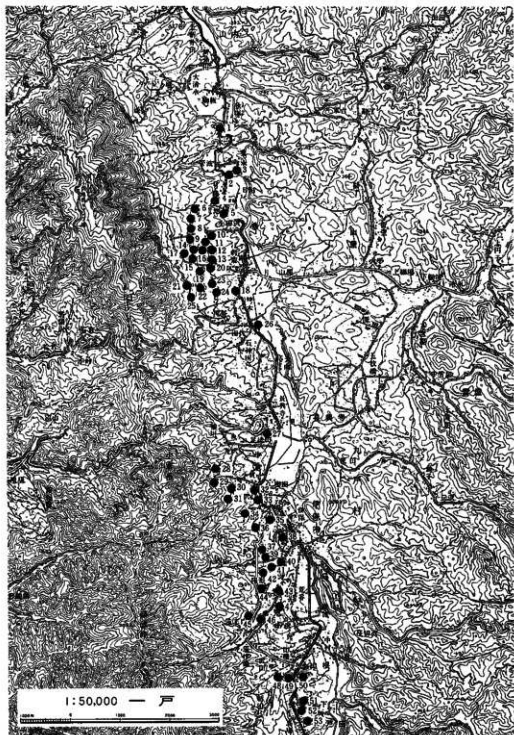
以上、村内における遺跡について概観してきたが、時代・遺跡毎にその内容に疎密はあるものの縄文時代早期からの人間の営みの痕跡をたどることができた。しかし、これらのすべては人間の開発行為に伴って発見・調査された遺跡であるため、おのずから限定された資料でありほんの一部にすぎない。今後、山間部での分布調査が進行すれば遺跡の数もさらに増加するものと思われる。

〈引用・参考文献〉

- 石野公一(1972):『北上山系開発地域土地分類基本調査(一戸)』岩手県
岩手県教育委員会(1986):『岩手県中世城館跡分布調査報告書』
種市 進(1982):『折爪岳東麓の遺跡と湧水』『紀要Ⅱ』岩手県埋蔵文化財センター
平井 進(1984):『塚Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター



第5図 遺跡周辺の地形図



第6図 周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	時代	備考
1	丸本橋	大字江刺家第17地割字丸本橋	縄文(晩)	
2	菅原Ⅰ	# 第16地割字菅原	縄文(早・後・晩)	昭和63年調査
3	栗ノ木沢	# 第18地割字栗ノ木沢	縄文(早・後)、奈良・平安(土師)	昭和63年一帯調査
4	菅原Ⅱ	# 第16地割字菅原	縄文(晩)、平安(土師)	
5	道地	# 第14地割字道地		
6	道地Ⅱ	# 字藤嶋	縄文(後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集
7	道地Ⅲ	# #	縄文(前・中・後・晩)	#
8	藤Ⅰ	# 第14地割字藤嶋	縄文(前・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第50集
9	藤Ⅱ	# 第12地割	縄文(早～晩)、平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集
10	藤Ⅲ	# 第12地割	縄文(晩)	
11	藤Ⅳ	# 第12地割	縄文(晩)	
12	藤Ⅴ	# 第12地割	縄文(後・晩)	
13	江刺家Ⅰ	# 第12地割	縄文(晩)	
14	江刺家Ⅱ	# 第13地割	縄文(後・晩)	
15	江刺家Ⅲ	# #	縄文(中・後・晩)	
16	江刺家Ⅳ	# 第13地割字鎌倉	縄文(前・中・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第59集
17	江刺家Ⅴ	# #	縄文(中・後)	#
18	江刺家Ⅵ	# #	縄文(早・中・後)、平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集
19	岩宮Ⅰ	# 第6地割	縄文(晩)	
20	岩宮Ⅱ	# #	縄文(晩)	
21	滝谷Ⅰ	# #	縄文(晩)	
22	滝谷Ⅱ	# #	縄文(晩)	
23	滝谷Ⅲ	大字江刺家字岡本内	縄文(前・中・後・晩)、平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第49集
24	滝谷Ⅳ	# #	縄文(晩)、平安(土師)	
25	滝谷Ⅴ	# #	縄文(中・後・晩)、平安(土師)	
26	田代	# 第2地割字田代	縄文(早・前・中)、奈良	日本考古学年報 No.13 岩手県埋文センター文化財調査報告書第41集
27	長興寺	大字長興寺第3地割	縄文(中)	
28	小倉Ⅰ	大字小倉	縄文(中・後)	
29	小倉Ⅱ	# #	縄文(中)、奈良・平安(土師)	
30	小倉Ⅲ	大字伊保内	奈良・平安(土師)	
31	小倉Ⅳ	# #	縄文(中)	
32	南田Ⅰ	# #	縄文(晩)	
33	南田Ⅱ	# #	縄文(中・後・晩)	
34	壽田Ⅰ	# #	縄文(晩)	
35	壽田Ⅱ	# #	縄文(中)	
36	壽田Ⅲ	# #	奈良・平安(土師)	
37	伊保内Ⅰa	# #	縄文(早・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第53集
38	伊保内Ⅰb	# #	中世	#
39	川向Ⅰ	# #	縄文(中)、奈良・平安(土師)	
40	川向Ⅱ	# #	縄文(中)、奈良・平安(土師)	
41	川向Ⅲ	# #	縄文(中・晩)、平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集
42	川向Ⅳ	# #	奈良・平安(土師)	
43	尾形橋Ⅰ	# #	縄文(中?)、奈良・平安(土師)	
44	尾形橋Ⅱ	# #	縄文(中?)、奈良・平安(土師)	
45	遠志内Ⅰ	大字荒屋	縄文(後)	
46	遠志内Ⅱ	# #	縄文(中?)	
47	遠志内Ⅲ	# #	縄文(中)	
48	山根Ⅰ	大字山根	縄文(晩)	
49	山根Ⅱ	# #		
50	山根Ⅲ	# #	縄文(晩)	
51	牛の馬場Ⅰ	大字戸田	縄文(中)	
52	牛の馬場Ⅱ	# #	奈良・平安(土師)	
53	牛の馬場Ⅲ	# #	縄文(後)、奈良・土師(平安)	

第1表 周辺の遺跡一覧表

IV. 検出された遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡4棟・土坑類19基・落とし穴遺構2基・土器埋設遺構2基が検出された。出土した遺物は土器・土製品・石器・石製品で、土器では縄文時代前期と後期のものが主体をなしている。

1. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡

遺構(第7図、写真図版2)

調査区東側土手付近、AIIグリットに位置する。表土を除去した段階で検出されたが、耕作のため壁等は削平を受けており確認することはできなかった。第2号竪穴住居跡と重複関係にあり、本竪穴住居跡の方が新しく位置付けられる。炉は角礫を用いて構築されており、一辺が約40cmの方形に組まれた石囲い炉である。炉を構成している礫は、地山にほぼ垂直の状態で埋置されている。この竪穴住居跡に伴う柱穴としては、P₁₃・P₁₄・P₁₅が主柱穴の一部を構成していたものと思われる。柱穴の埋土は、すべて単層で黒褐色土を主体としたものである。

遺物 遺構からの遺物は出土していない。

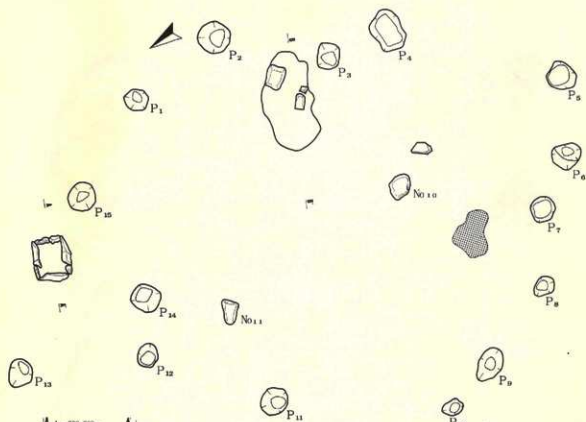
第2号竪穴住居跡

遺構(第7図、写真図版2)

調査区東側AIIグリット内に位置する。検出面は、II層下面～III層上面である。全体に削平を受けており、炉・柱穴等を検出しただけで壁は確認されなかった。柱穴配置などから、推定で5.5mの規模を持つ長方形ないしは隅丸方形を呈していたものと思われる。第1号竪穴住居跡と第54号土坑の一部と重複しており、いずれの遺構よりも本住居跡は古く位置付けられる。炉は、東側によった位置に検出されており、地面を浅く掘りくぼめただけの地床炉の形態を持つものである。南西側によった所からは現地性の焼土が1箇所検出されている。この住居跡に伴うと思われる柱穴はP₁～P₁₂を検出しているが全容については不明である。

遺物(第8図、写真図版11・14)

炉のなかより2点、床面より7点の縄文土器と床面から2点の礫石器が出土している。1・4～6を除いた縄文土器には植物性繊維が含まれている。一般に胎土は緻密で焼成も良好である。3はやや丸みをもった口唇部を持ち、口縁部は直立している。口唇部上には原体の圧痕が施文され口唇部直下には約2cm幅の横走する単節縄文が、それ以下には同じ原体によって斜行縄文が施文されている。7は複節の斜行縄文が施文され、一部原体の回転方向を変化させて羽



1. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石混入。
2. 7.5YR 5/8 明褐色 焼土層。
3. 7.5YR 5/8 明褐色 黄褐色浮石顆粒混入。
4. 5 YR 5/8 明赤褐色 地口が加熱を受けている。



1. 7.5YR 2/3 極暗褐色 少量の炭化物、焼土、黄褐色浮石顆粒混入。
2. 7.5YR 4/5 褐色 焼土層。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	24×24	36×36	35×25	44×34	32×27	30×30	29×27	24×20
深さ cm	28	27	27	40	34	39	41	30

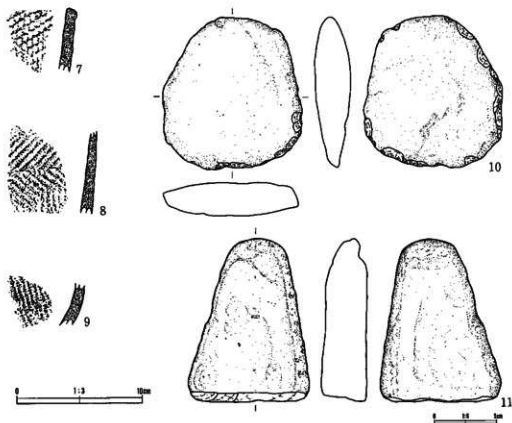
No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	38×26	25×18	32×28	24×22	32×30	30×27	30×22
深さ cm	22	50	42	40	57	38	35



0 1:2 5cm

番号	地点・層位	土種	部位	文様の特徴・備考	内面調査	分類	数量
1	2号住居跡、B'	深鉢	底面	小機軸む	—	—	11
2	2号住居跡、B'	深鉢	胴部	直体不明、底面均色、もろい	ナデ	—	11
3	2号住居跡、床	深鉢	口縁部	単部織文、口唇部陪体正紋	ナデ	目縷部群	11
4	2号住居跡、床	深鉢	胴部	圓目状機軸文	ナデ	目縷部群	11
5	2号住居跡、床	深鉢	胴部	圓目状機軸文、少量多量混入	ナデ	目縷部群	11
6	2号住居跡、床	深鉢	胴部	穴縁文、除帯(単部織文)	ナデ	目縷部群	11

第7図 第1・2号竪穴住居跡



番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調整	分類	出所		
7	2号住居跡、灰	深鉢	口縁部	波線縄文、小窪合	ナデ	日曜Ⅱ群	11		
8	2号住居跡、灰	深鉢	胴部	非結束羽状縄文(0段多条)、金粟母合	ナデ	日曜Ⅱ群	11		
9	2号住居跡、灰	深鉢	底部付近	草線縄文、もうい	ナデ	日曜Ⅱ群	11		
番号	地点・層位	器種	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考	出所
10	2号住居跡、灰層	石皿類	硬砂岩	230	224	56	4000	内面より周縁に打ち欠きあり	14
11	2号住居跡、灰層	石皿類	花崗閃緑岩	260	196	84	6100	一面磨面あり	14

状の文様を表出している。口縁部はほぼ直立し、口唇部は平坦であるが、外側に向かって傾斜している。8は0段多条の原体で回転方向を変化させて羽状縄文を表出している。9は丸底ないしは尖底を呈する底部付近の破片である。植物性繊維が混入している他の土器に比べ、胎土はやや脆い。植物性繊維が混入した土器の色調は、全体にくすんだ褐色ないしは黄褐色を呈している。10の礫石器は、両面から周縁の一部に敲打が加えられている。11の礫石器は全面に磨面が認められ、意識的にこのような形状を作り出したものと思われる。

以上のような出土遺物から、この竪穴住居跡は縄文時代前期に属するものと思われる。

第8図 竪穴住居跡出土遺物

第3号竪穴住居跡

遺構（第9図、写真図版3）

調査区東側の段丘縁、E1区に位置する。竪穴住居跡の東半分は既に失われており、その全容については不明である。第61号・62号土坑と一部重複関係にあり、本竪穴住居跡は61号土坑より古く62号土坑より新しい。埋土は黄褐色浮石混じりの暗褐色土を主体として構成されている。竪穴住居跡の床面を直接覆う暗褐色土は砂質シルトで、少量の炭化物の混入が認められる。壁はやや外傾気味に立ち上がっており、北壁で15cm、西壁で34cmを測る。床面は、ほぼ平坦で特に第62号土坑との重複部分には貼床が施され、堅い面が形成されている。炉は、竪穴住居跡のほぼ中央部にあるがやや西側に偏して構築されており、地面を浅く掘りくぼめただけの地床炉の形態を持つものである。柱穴はP₁・P₂の2つが検出されているが、本来は4本で主柱穴を構成していたものと思われる。

遺物（第9～13図、写真図版10～15）

土器（12～42）床面より出土した土器は3点（12～14）、その他はすべて埋土からの出土である。植物性繊維を含んだ土器は3点出土しているが、これらは流れ込みによるものと思われる。40は、口縁部が直立し、口唇部は丸みを持っている。41は、0段多条による原体で非結束の羽状縄文が施文されている。42は、貝殻腹縁瓦痕文が施文されている。この竪穴住居跡から出土している土器の主体を占める植物性繊維を含まない土器は、沈線文などによって文様が構成されるものと、単に地文だけによるものに分けられる。一般に前者は、胎土・焼成とも良好な土器が多く、内外面に赤色顔料が塗布された土器も数点出土している。21～24は、沈線文のみにより文様が構成されている。21は、鉢形土器の口縁部である。波状口縁を呈し、波状の頂部には二重の円形沈線文が施文され、その中央部には貼瘤が付けられている。22は平縁を呈し、口縁部はやや外傾気味である。口唇部には指頭による圧痕が認められる。25は、沈線文と充填縄文が施文された隆帯によって文様が構成されている。26・27は、同一個体の口縁部と胴部の破片である。口縁部は緩やかに外傾し、口唇部に行くにつれて肥厚している。胴部は途中で膨らみを持っている。隆帯、細く浅い沈線文、磨消縄文により文様が構成されている。口縁部は緩やかな波状を呈し、文様帯は口縁部に集中しており、胴部には単節斜行縄文が施文されるだけである。

地文だけのものには、胴部全面に網目状燃糸文（19・30・33～37）が施文されるもの、条線文によるもの（18・20）、燃糸文によるもの（13・17・28・29・31・32）、縄文のみによるもの（38・39）がみられる。28の口縁部直下に貼瘤が付けられ、35・36は折り返し口縁になっている。

土製品（53～56）同一個体の小形の切斷壺形土器である。53・56は上蓋の部分、54・55は下

半部に相当する。焼成以前に切断されており、切断面は刻目状になっている。切断部位は、胴下半で鋸歯状の切断方法を採用している。

石器 (43・52・57～60) 43・52は不定形の剥片石器、57～60は礫石器である。すべて埋土内からの出土である。43は主要剥離面が残らないほど入念な調整がなされ、刃部調整は全周縁に及んでいる。先端部は鋭角になっており、左側縁部は内湾している。断面は凸レンズ状を呈している。44は一部に自然面を残し片面から2縁辺に二次調整が加えられている。45は両面から加工され、湾曲した1側縁に刃部が形成されている。46は片面加工で周縁に二次調整が加えられ、特に2側縁に顕著である。断面はやや肉厚である。47は両面加工であるが、背面の2側縁に二次調整が加えられている。48は両面加工で、縁辺には特に微細な二次調整は認められない。49は一部に自然面を残し、背面の1縁辺に二次調整が加えられている。50は両面加工であるが、特に連続した二次調整は認められない。51は腹面に大きく主要剥離面を残し、背面の2側縁に二次加工がなされている。52は特に二次調整は認められないが、側縁の一部にノッチが見られる。57・58は長方形の礫の両面に凹部を持つくぼみ石である。58は、両面に2個ずつくぼみ部を持っている。60は長方形の礫を使用して磨石とくぼみ石を兼用したものである。59は円礫の一部に打撃を加え刃部を作り出した礫器である。

床面出土の土器、埋土下部から多量の縄文時代後期の土器を出土していることから、この竪穴住居跡は縄文時代後期前葉に属するものと思われる。

第4号竪穴住居跡

遺構 (第14図、写真図版4)

調査区南端HIIグリットに位置する。II層上面、第2号土器埋設遺構の下位より検出された。第67号土坑と一部重複関係にあり、本竪穴住居跡が新しく位置付けられる。平面形は円形を呈し、径260cmの規模を持つ。埋土は黒褐色のシルトを主体としており、壁際には黄褐色浮石粒が多量に混じった極暗褐色土が堆積している。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、東壁で10cm、西壁で3cm、南壁で10cm、北壁で4cmを測る。床面は平坦で、特に炉の北側と北西壁寄りの部分が堅くなっている。竪穴住居跡の北西部分の外側も堅くなっており、この部分が出入り口に相当するとも考えられる。炉は、南東寄りにあり中央部から若干偏った場所に構築されている。抜き取り痕は認められなかったが、周囲に数個の礫が残存しており、方形の石囲い炉であったと思われる。炉の南東隅には浅いくぼみ部分がある。炉はあまり加熱を受けていない。柱穴状のピットは6個検出されており、規模・形状からP₄を除いた5個で構成されていたものと思われる。

遺物 (第14図、写真図版11・12)

土器 (61~72) すべて埋土内からの出土である。これらの遺物は、10~20cmほどの薄い埋土内から出土したものであり、64を除いた土器はこの竪穴住居跡に伴うものであると思われる。64は、胎土に少量の植物性繊維を含んでいる。61は底部破片である。外面に文様は認められないが、無文の部分には入念にミガキがかけられている。底部外面には、植物の葉脈痕が認められる。62は、波状口縁をなす深鉢形土器の口縁部である。口縁部はほぼ直立しているが、口唇部直下で肥厚している。沈線文と磨消縄文によって文様が構成されている。63は、波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部である。直線を基本とする沈線文と磨消縄文により文様が構成されている。71は、深鉢形土器の胴部である。沈線文と磨消縄文により文様が構成されている。68・70は、平行沈線文が施文された壺形土器の口縁部である。65・72は、網目状燃糸文が地文として施文された深鉢形土器である。66は、地文に無節斜行縄文、69は条線文が施文された深鉢形土器である。

埋土出土の土器からではあるが、この竪穴住居跡は縄文時代後期前葉に属するものと思われる。

2. 土坑

第51号土坑

遺構 (第15図、写真図版5)

調査区北西側CⅢグリットに位置する。Ⅱ層上面を検出面としている。平面形は不整形、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部で200×171cm、底面で144×129cm、深さ54cmを測る。底面は平坦な面を形成せず、壁は緩やかな傾斜を持って開口部に至る。全体に黄褐色浮石を含み、人為的堆積状況を示している。

遺物 (第19・22、写真図版11・14)

土器 (73~76) すべて埋土内から出土したものである。73~75は同一個体で、胎土に植物性繊維を含んでいる。器面には、燃糸文が施文されている。76は、非常に薄手で器面には燃糸文が施文されている。

石器(133) 埋土から石鏃が1点出土している。茎部はなく、基部が丸みをもつ円基鏃である。

第52号土坑

遺構 (第15図、写真図版5)

調査区西側DⅢグリットに位置する。Ⅱ層上面を検出面としている。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で128×121cm、底面で109×101cm、深さ53cmを測る。底面は平

坦な面で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は3層で構成され、全体に黄褐色浮石が混入している。第2層は中礫浮石に相当する砂質シルトである。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

第53号土坑

遺構 (第15図、写真図版5)

調査区東側F Iグリットに位置する。II層上面を検出面としている。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。規模は推定で、開口部で161×153cm、底面で144×119cm、深さ65cmを測る。底面はやや凹凸があり、壁は外傾気味に立ち上がっている。埋土には全体に南部浮石の混入がみられ、自然堆積の過程で壁の崩壊土が流入したと思われる。

遺物 (第19、写真図版11)

土器 (77) 埋土から植物性繊維を含んだ深鉢形土器の口縁部が出土している。遺構外出土の179と同一個体であり、流れ込みの可能性が高い。

第54号土坑

遺構 (第15図、写真図版5)

調査区北東側D IIグリットに位置する。II層下面を検出面としている。第2号竪穴住居跡と重複関係にあり、本土坑が新しい。平面形は不整形円形、断面形はU字形を呈する。規模は、開口部で113×99cm、底面で93×67cm、深さ70cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、底面と同様に凹凸が激しい。埋土は3層に分けられるが、第2層は非常に堅く意識的に埋め戻したとも考えられる。

遺物 (第19図、写真図版10・11)

土器 (78・79) すべて埋土からの出土である。78は、内外面朱塗りの施された甕形土器である。79は胴部下半から底部にかけて無文帯を設け、その上位には地文として無節斜行縄文が施された深鉢形土器の底部である。

第55号土坑

遺構 (第16図、写真図版6)

調査区西側E IIIグリットに位置する。II層上面を検出面としている。第58号土坑と重複関係にあり、本土坑が新しい。平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。規模は推定で、開口部で172×168cm、底面で213×183cm、深さ153cmを測る。底面は平坦な面を形成している。埋土下部には、壁の崩壊土と思われる黄褐色浮石が多量に堆積しており、堆積状況もゆるやかで自

然堆積を示している。一方、埋土上部には多量の土器・焼土・炭化した堅果類がみられ、ある程度自然堆積が経過した後には人為的な投棄が繰り返されたものと思われる。

遺物 (第19・20・22図、写真図版10～14)

土器 (80～96) 沈線文が主体となって文様が構成されるものを中心をなしている (81・84・91・94～96)。このなかには、隆帯と磨消縄文の併用 (94) や充墳縄文によるもの (95) などがある。器形の推定できる84は、内外面とも朱塗りが施されている。胴部の屈曲部に一条の沈線文が巡り、口縁部文様帯と胴部文様帯を分離している。各々の文様帯のなかでは、沈線文による楕円形文・方形区画文が配列されている。地文のみによる土器では、網目状捺糸文 (80・86・90・93)、捺糸文 (85・89)、条線文 (87・92) の施文された土器が出土している。

土製品 (130～132) 139は鐔形土製品である。つり鐘状の鈕を持ち、この部分には横方向に孔が穿たれている。沈線文と磨消縄文により相対する渦巻文が描かれている。131は、網目状捺糸文が施文された土器片を再利用した円盤状土製品である。132は、小型の切断壺形土器である。器壁は非常に薄く、蓋の部分に相当する。焼成以前に胴部上半が切断されているが、切断形態については不明である。

石器 (134) 不定形石器が1点出土している。両面加工であり、微細な調整ではないが1側縁に加工が施されている。

第56号土坑

遺構 (第16図、写真図版6)

調査区西側E IIIグリット、55号土坑の北側に位置する。II層上面を検出面としている。平面形は不整形、断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部で184×154cm、底面で145×98cm、深さ43cmを測る。底面は平坦な面を形成しており、中央部が僅かにくぼんでいる。埋土は3層で構成されており、中層浮石に黄褐色浮石細粒が混入している。しまりがなく、非常にやわらかい。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

第57号土坑 (第16図、写真図版6)

調査区東側F Iグリットに位置する。II層上面を検出面としている。平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部で104×98cm、底面で103×95cm、深さ39cmを測る。底面は平坦な面を形成しており、南西隅の底面直上には人頭大の円礫があるが、遺構との関係は不明である。埋土はほぼ4層に区分され、全体に焼土・炭化物の混入がみられる。第2層からは、炭化した堅果類が出土している。

遺物 遺構からの遺物は出土していない。

第58号土坑

遺構 (第16図、写真図版6)

調査区西側E IIIグリットに位置する。55号土坑と重複関係にあり、本土坑が古い。平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。推定される規模は、開口部で(127)×122cm、底面で(140)×(127)cm、深さ112cmを測る。埋土は55号土坑と類似しており、埋土下部はしまりのない自然堆積を示し、その後遺物などの人為的な投棄が繰り返されたものと思われる。

遺物 (第20・21図、写真図版10～12)

土器 (97～107) 全て埋土内からの出土である。97・104は多条沈線文のみによって文様が構成される鉢形土器である。97は波状口縁を呈し、波状の頂部には貼瘤が付される。その下には弧状沈線文が施されている。胴部中央の括れを持つ部分に1条の平行沈線文が巡り、口縁部文様帯と胴部文様帯が分離される。それぞれの文様帯では渦巻沈線文と方形区画沈線文により文様が構成されている。104には、多条沈線により横方向に展開する入り組み状の沈線文が施される。100は波状口縁をなす鉢形土器の口縁部である。口唇部は平滑に調整され、口縁部は分厚くなっている。沈線文と充填縄文により文様が構成されている。101は鉢形土器の口縁部である。波状口縁をなし、波状頂部の口縁部には貼瘤状の隆起が見られる。沈線文と充填縄文により文様が構成される。105は深鉢形土器の胴部破片である。隆帯、円形と方形区画の沈線文、充填縄文により文様が構成されている。107は深鉢形土器の胴部破片である。隆帯、沈線文、充填縄文により文様が構成されている。106は曲線状の沈線文と磨消縄文による文様が構成されている。102・103は地文だけによるものである。102は原体の側面圧痕、103は細い撚糸文により施されている。

第59号土坑

遺構 (第17図、写真図版7)

調査区南東側F IIグリットに位置する。検出面はII層上面である。平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部で118×116cm、底面で148×139cm、深さ112cmを測る。底面は平坦な面を形成しており、中央部に20×20cm、深さ10cm程度の副穴を1個伴っている。副穴には、長さが15cmほどの長大な鎌が2個並べて埋置されている。埋土は全体的に黄褐色浮石が多量に混じり、ゆるやかな堆積状況を示しており自然堆積と思われる。

遺物 (第21図、写真図版12・13)

土器 (108～117) 全て埋土内からの出土である。108・110は壺形土器の底部と口縁部である。直線状の沈線文による文様が描かれる。108は内外面とも朱塗りが施されている。111は小型の鉢形土器の口縁部である。無文の部分に数条の施文が施文される。112は内外面に朱塗りが施さ

れた鉢形土器の口縁部である。口唇部には沈線文、胴部は平行沈線文、曲線状の沈線文が施文されている。113は、波状口縁を呈する鉢形土器の口縁部である。波状の頂部には螺旋状の突起を持ち、胴部は曲線状の沈線文によって文様が構成されている。内外面とも朱塗りが施されている。114は内外面に朱塗りが施された鉢形土器の口縁部である。口唇直下に2条の平行沈線文が巡り、胴部文様は曲線状の沈線文により描かれている。115・116・117は、地文としてそれぞれ条線文・網目状燃糸文が施文されている。109は胎土に植物性繊維が混入された深鉢形土器の口縁部である。口縁部はほぼ直立し、口唇部は平滑に調整され、内側に傾斜している。地文として不整燃糸文が施文されている。

第60号土坑

遺構 (第17図、写真図版6)

調査区南東側FⅡグリットに位置する。検出面はⅡ層上面である。平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。規模は開口部で135×125cm、底面で140×131cm、深さ110cmを測る。底面のほぼ中央部に径25×20cm、深さ5cmほどの副穴を伴っている。埋土下位には全体に黄褐色浮石が混じり、上部には中振浮石相当の砂質シルトの再堆積が見られる。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (118・119) 全て埋土内からの出土である。118は、壺形土器の口縁部付近である。丁寧にミガキが加えられた上に平行沈線文が施文されている。119は深鉢形土器の胎土に少量の植物性繊維を含んだ深鉢形土器の底部付近である。焼成は良くきわめて堅い。地文として縦位の燃糸文が施文されている。

第61号土坑

遺構 (第16図、写真図版7)

調査区東側EⅠグリットに位置する。第3号竪穴住居跡を精査中に検出された。第3号竪穴住居跡と重複関係にあり、本土坑が新しい。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。規模は、第3号竪穴住居跡を検出した面で開口部の推定138×123cm、底面で112×110cm、深さ54cmを測る。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (120) 地文として、縦位の燃糸文が施文された土器である。

第62号土坑

遺構 (第16図、写真図版7)

調査区東側E Iグリットに位置する。第3号竪穴住居跡の精査中に検出された。第3号竪穴住居跡と重複関係にあり、本土坑が古く位置付けられる。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。規模は第3号竪穴住居跡の床面を基準にすると、開口部で推定124×91cm、底面で94×73cm、深さ42cmを測る。埋土上部には砂の層が見られ、雨水により斜面上方から流入したものである。

遺物 (第21・22図、写真図版12・13)

土器 (121・122) 全て埋土内からの出土である。121は手づくねの小型の鉢形土器である。赤褐色を呈し、器壁は非常に薄いが堅い。122は、尖底をなすと思われる深鉢形土器の底部付近である。胎土に少量の植物性繊維を含み、焼成も良好で非常に硬質である。地文として墨糸文が施文されている。

石器 (135～138) 全て埋土内からの出土である。135・136は両面加工の不定形石器である。周縁には連続した微細な剝離は見られない。137は凹部を両面に残し、擦石も兼ねている。138は両面に凹部を残し、周縁の一部に敲打痕が認められる。

第63号土坑

遺構 (第18図、写真図版7)

調査区東側F IIグリットに位置し、第59号土坑と隣接している。検出面はII層下面である。平面形は不整形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で81×78cm、底面で60×49cm、深さ37cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦な面を形成している。埋土には全体に黄褐色浮石粒の混入が見られる。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (123) 埋土内からの出土である。胎土に少量の植物性繊維が含まれている。器面には強いミガキがかけられ、その上に貝殻腹縁文が施文されている。

第64号土坑

遺構 (第18図、写真図版8)

調査区東側H IIIグリットに位置する。検出面はII層下面である。平面形は不整形、断面形はU字形を呈する。規模は開口部で124×79cm、底面で73×49cm、深さ38cmを測る。埋土は2層で構成されて黒色と暗褐色のシルトに黄褐色浮石粒が多量に混じっている。壁面は緩やかに立ち上がるが凹凸が激しい。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器(124) 埋土内から出土している。胎土に植物性繊維を含み、器面には綾絡文が施文されている。

第65号土坑

遺構 (第18図、写真図版 8)

調査区南側EⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層下面である。平面形は不整形円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で81×80cm、底面で67×56cm、深さ39cmを測る。埋土は3層で構成されており、特に第1層には多量の砂が混入している。底面は平坦な面を形成している。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

第66号土坑

遺構 (第18図、写真図版 8)

調査区南側GⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層下面である。平面形は不整形円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で93×72cm、底面で81×45cm、深さ30cmを測る。埋土は2層で構成されており、第1層には多量の砂が混入している。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

第67号土坑

遺構 (第17図、写真図版 8)

調査区南側HⅢグリットに位置する。第4号竪穴住居跡の精査中に検出され、本土坑が古く位置付けられる。第Ⅱ層を遺構構築面としている。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。規模は開口部で180×170cm、底面で97×91cm、深さ144cmを測る。埋土は7層で構成されており、下位の層ほど壁の崩壊土と思われる黄褐色浮石が多量に混入している。本来、側壁は垂直に立ち上がっていたものと思われる。底面は平坦な面を形成している。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

第68号土坑

遺構 (第18図、写真図版 9)

調査区南側FⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層下面である。平面形は不整形円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で67×66cm、底面で52×44cm、深さ24cmを測る。埋土は2層で構成されており、第2層には多量の炭化物が混入しており、人為堆積と思われる。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (125~127) 全て埋土内からの出土である。3点とも、胎土に植物性繊維が含まれている。125は、綾絡文が施文された深鉢形土器の胴部である。126は単節縄文が施文された丸底の尖底を呈する深鉢形土器の底部付近である。127は口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇部がやや外側に突き出している。不整捺糸文を地文とし、2条1組みの横位綾絡文が口縁部及び胴部に数段施文されている。

第69号土坑

遺構 (第18図、写真図版9)

調査区南側GⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層下面~Ⅲ層である。平面形は不整楕円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部で73×53cm、底面で55×35cm、深さ24cmを測る。埋土は2層で構成されており、第2層には砂が混入している。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (128) 埋土内から出土している。曲線状の沈線文が認められるが、摩滅が著しく詳細は不明である。

3. 落とし穴遺構

第101号落とし穴遺構

遺構 (第18図、写真図版8)

調査区南側EⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層上面である。平面形は長楕円形、断面形はV字状を呈する。規模は開口部で283×47cm、底面で274×20cm、深さ120cmを測る。長軸方向は北東-南西方向を指し、等高線に対して斜交している。長軸方向の両端は開口部よりも奥に挟り込んでいる。南西端では、側壁の途中に奥に挟れ込んだ段が1段形成されている。両側壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾している。埋土は黒褐色を主体に、下位には壁の崩壊土と思われる南部浮石が堆積し、最下層には15cmほどの層厚を持った黒褐色土が薄く堆積している。全体にしまりがなく自然堆積と思われる。

遺物 (第21図、写真図版12)

土器 (129) 埋土の中から、単節斜行縄文が施文された土器が出土している。

第102号落とし穴遺構

遺構（第19図、写真図版8）

調査区南側GⅢグリットに位置する。検出面はⅡ層上面である。平面形は長楕円形、断面形はV字状を呈する。規模は開口部で332×76cm、底面で285×23cm、深さ121cmを測る。長軸方向は南東—北西方向を指し、等高線に対して斜交している。長軸方向の両端は開口部よりも奥に挟り込んでいる。側壁はほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近で大きく外反している。埋土は、黒褐色を主体に壁の崩壊土と思われる南部浮石がブロック状に入り込んでいる。全体にしまりがなく、自然堆積と思われる。

遺物 遺構からは遺物は出土していない。

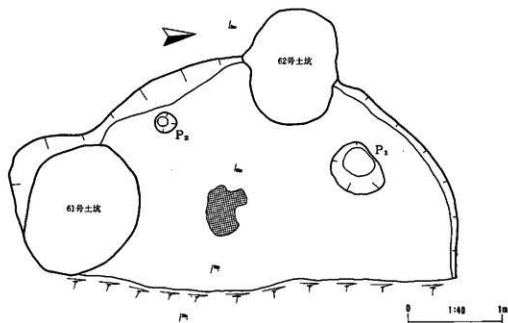
4. 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構（第23図、写真図版9—16）

調査区西側DⅠグリットに位置する。表土を除去した段階で検出された。明瞭な掘り方は確認されなかった。口縁部が欠損した深鉢形土器が正立の状態で埋設されている（139）。底部付近に約3cm幅の無文帯を設け、器面には地文として網目状燃糸文が施文されている。

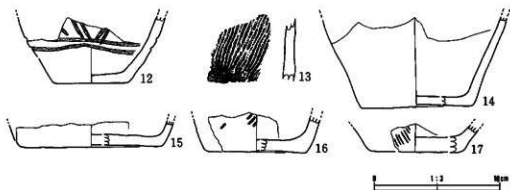
第2号土器埋設遺構（第23図、写真図版9—16）

調査区南側HⅢグリット、第4号竪穴住居跡の上位に位置する。表土を除去した段階で検出された。明瞭な掘り方は確認されなかった。底部が欠損した深鉢形土器が正立の状態で埋設されている（140）。口縁部は緩やかに外傾し、口唇部付近で肥厚している。器面には地文として網目状燃糸文が施文されている。



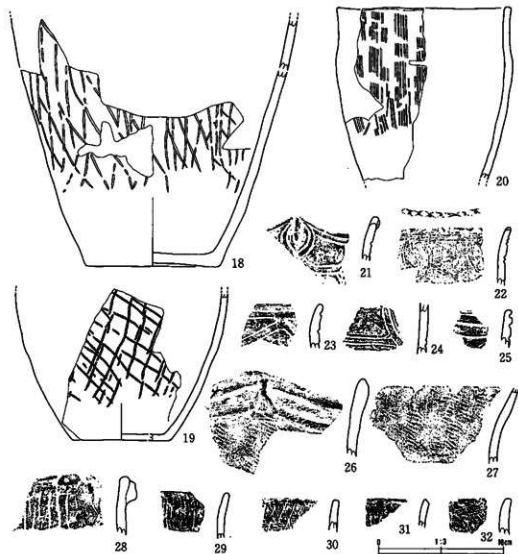
1. 7.5YR 2/3 棕褐色 ϕ 5mmの黄褐色浮石粒を混入。
2. 7.5YR 4/3 褐色 粘性なし、 ϕ 10mm以上の黄褐色浮石粒混入。
3. 7.5YR 2/2 暗褐色 砂質、炭化物、黄褐色浮石粒混入。
4. 7.5YR 2/3 棕褐色 1層に黒色土が混じる。
5. 7.5YR 4/6 褐色 しまりがあり、かたい。

№	P ₁	P ₂
長cm	60×47	24×22
厚9cm	44	40



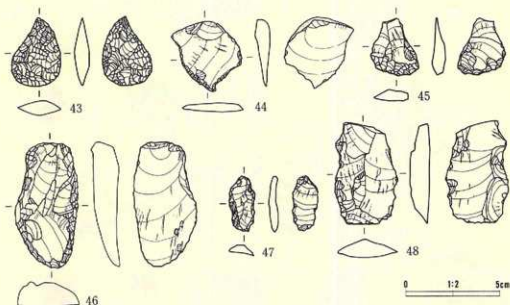
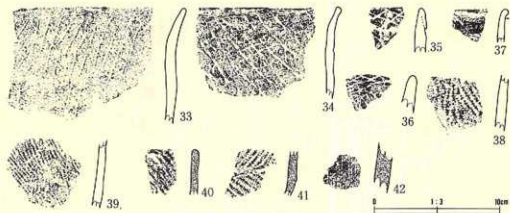
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内径調整	分 類	高さ
12	3号住居跡、床面	陶鉢	底面	比喩文		粗器、群	12
13	3号住居跡、床面	陶鉢	器部付近	雲文	ナヅ	粗器、群	11
14	3号住居跡、床面	陶鉢	器部	雲文、ミガキ	ミガキ	粗器、群	12
15	3号住居跡、埋土	陶鉢	器部	雲文	ミガキ	粗器	12
16	3号住居跡、埋土	陶鉢	器部	雲脚端文	ミガキ	粗器、群	12
17	3号住居跡、埋土	陶鉢	器部	雲文	ミガキ	粗器、群	12

第9図 第3号竪穴住居跡・第3号竪穴住居跡出土遺物(1)



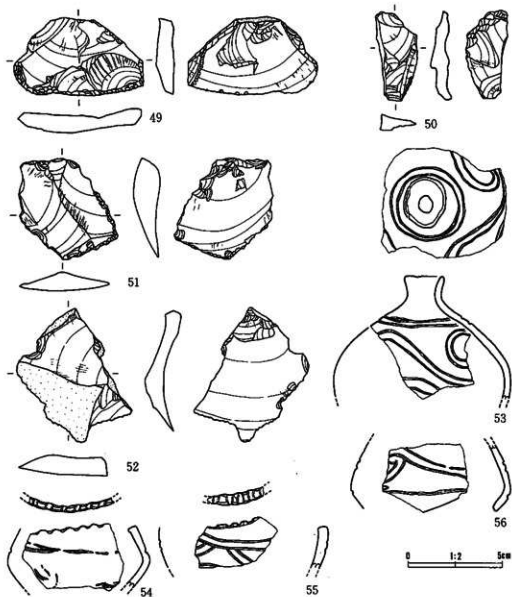
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調査	分類	数量
18	3号住居跡、埋土	脚鉢	胴部	網目状の垂線文	ナデ	田群d,層	10
19	3号住居跡、埋土	脚鉢	胴部	網目状垂線文	ミガキ	田群d,層	13
20	3号住居跡、埋土	脚鉢	胴部	垂線文、ミガキ	ミガキ	田群d,層	10
21	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文、表面に粘層	ミガキ	田群a,層	11
22	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文、口縁部指環状痕	ナデ	田群a,層	11
23	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文	ミガキ	田群a,層	11
24	3号住居跡、埋土	鉢	胴部	沈線文	ミガキ	田群a,層	11
25	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文、施帯、光面縁文	ミガキ	田群a,層	11
26	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	施帯、単筋縁文	ミガキ	田群b,層	11
27	3号住居跡、埋土	鉢	胴部	施帯、単筋縁文	同一器体	田群b,層	11
28	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	砥体表面凹凸、糸網の広い層位標本文、粘層	ミガキ	田群b,層	11
29	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	標本文	ミガキ	田群d,層	11
30	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	網目状垂線文	ミガキ	田群d,層	11
31	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	標本文	ナデ	田群d,層	11
32	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	標本文	ミガキ	田群d,層	11

第10図 第3号竪穴住居跡出土遺物(2)



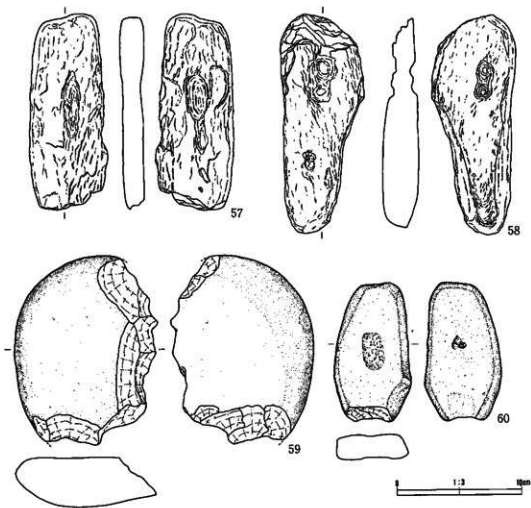
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・参照	内面調査	分類	式目		
33	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状燃余文	ヒダキ、ナデ	II期d期	11		
34	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状燃余文	ヒダキ	II期d期	11		
35	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状燃余文、折り返し口縁	ナデ	II期d期	11		
36	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状燃余文	ヒダキ	II期d期	11		
37	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状燃余文	ヒダキ	II期d期	11		
38	3号住居跡、埋土	深鉢	胴部	単節縄文	ナデ	II期d期	11		
39	3号住居跡、埋土	深鉢	胴部	短位結文、単節縄文	ナデ	II期d期	11		
40	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	0段多条	ナデ	II期e期	11		
41	3号住居跡、埋土	深鉢	胴部	連続折伏縄文、0段多条	ナデ	II期d期	11		
42	3号住居跡、埋土	深鉢	胴部	目形縄文	ナデ	I期b期	11		
番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(K)	備考	式目
43	3号住居跡、埋土	不定形石器	チャート	36	25	7	6.8		14
44	3号住居跡、埋土	不定形石器	凝灰岩	38	32	8	8.3		13
45	3号住居跡、埋土	不定形石器	チャート	30	24	6	4.2		14
46	3号住居跡、埋土	不定形石器	凝灰岩	65	33	13	37.8		13
47	3号住居跡、埋土	不定形石器	チャート	29	13	4	2.3		14
48	3号住居跡、埋土	不定形石器	凝灰岩	54	32	1	19.4		13

第11図 第3号竪穴住居跡出土遺物(3)



番号	地点・部位	形 態	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考	写真
49	3号住居跡、埋土	不定形石器	燧灰岩	41	68	9	34.4		13
50	3号住居跡、埋土	不定形石器	燧灰岩	47	21	10	9.2		13
51	3号住居跡、埋土	不定形石器	燧灰岩	54	46	13	27.6		13
52	3号住居跡、埋土	不定形石器	燧灰岩	72	46	10	34.0		13
番号	地点・部位	形 態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考	写真	
53	3号住居跡、埋土	器	—	—	—	—	切跡土器 蓋	沈黙文	13
54	3号住居跡、埋土	器	—	—	—	—	切跡土器 蓋	同一體	13
55	3号住居跡、埋土	器	—	—	—	—	切跡土器 胴部	沈黙文	13
56	3号住居跡、埋土	器	—	—	—	—	切跡土器 胴部	沈黙文	13

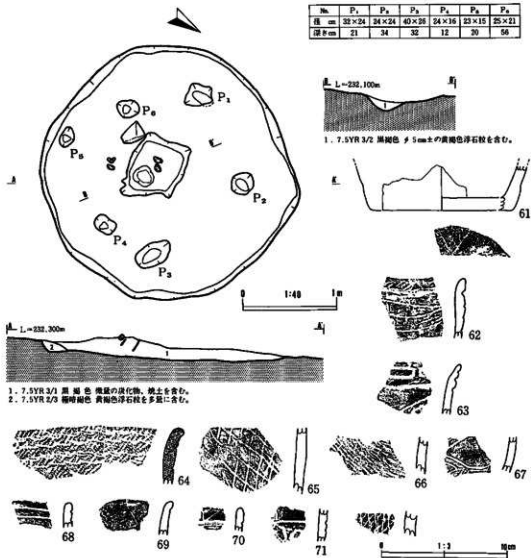
第12図 第3号竪穴住居跡出土遺物(4)



番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	備	考	図番
57	3号住居跡、埋土	磨石Ⅰ	粘板岩	166	62	19	276			15
58	3号住居跡、埋土	磨石Ⅰ	安山岩	176	66	30	401			15
59	3号住居跡、埋土	磨石	硬砂岩	151	113	39	909			15
60	3号住居跡、埋土	磨石Ⅰ	硬砂岩	111	62	23	260			15

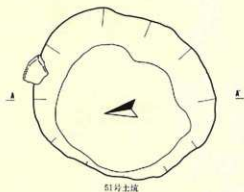
第13図 第3号壘穴住居跡出土遺物(5)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	32×24	24×24	40×26	24×16	22×15	25×21
厚 mm	21	34	32	12	20	56



番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内径測定	分級	長さ
61	4号住居跡、埋土	深鉢	底部	ナデ、葉脈状	ナデ	Ⅲ群	12
62	4号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、磨削縄文	ミガキ	Ⅲ群c層	11
63	4号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、輪帯、磨削縄文	ミガキ	Ⅲ群b層	11
64	4号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	輪帯文、葉脈縄文	ナデ	Ⅲ群e層	12
65	4号住居跡、埋土	深鉢	胴部	網目状沈線文	ミガキ	Ⅲ群d層	11
66	4号住居跡、埋土	深鉢	胴部	輪帯縄文	ミガキ	Ⅲ群c層	11
67	4号住居跡、埋土	深鉢	胴部	沈線文、磨削縄文	ナデ	Ⅲ群b層	11
68	4号住居跡、埋土	豆形	口縁部	沈線文、ミガキ	ミガキ	Ⅲ群d層	11
69	4号住居跡、埋土	豆形	口縁部	糸線文	ミガキ	Ⅲ群d層	11
70	4号住居跡、埋土	豆形	口縁部	沈線文、磨削縄文	ミガキ	Ⅲ群c層	11
71	4号住居跡、埋土	豆形	胴部	沈線文、磨削縄文	ナデ	Ⅲ群c層	11
72	4号住居跡、埋土	豆形	胴部	網目状沈線文	ナデ	Ⅲ群d層	11

第14図 第4号竪穴住居跡・第4号竪穴住居跡出土遺物

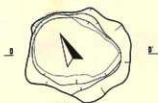


51号土坑

A L=230,600m

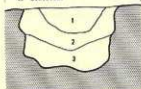


1. 7.5YR 4/4 褐色 黄褐色浮石粒少量混入。
2. 7.5YR 1.7/1 黑色 少量の砂混入。
3. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石粒微量混入。
4. 7.5YR 2/2 暗褐色 黄褐色浮石粒多量混入。
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 粘質、土まじり。
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 黒色土と黄褐色浮石粒の混土。
7. 7.5YR 3/4 褐色 黄褐色浮石粒多量混入。
8. 7.5YR 3/6 褐色 大粒の黄褐色浮石粒。



54号土坑

A L=219,900m

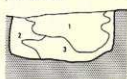


1. 7.5YR 2/2 黄褐色 砂質、微量の炭化物混入。
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 1層よりも黄褐色浮石粒混入が多くなる。
3. 7.5YR 4/4 褐色 黒色土と黄褐色浮石粒との混土。

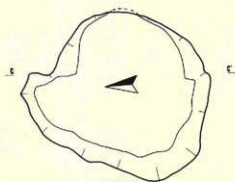


52号土坑

A L=230,900m

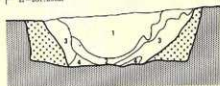


1. 7.5YR 2/2 暗褐色 少量の砂、黄褐色浮石粒混入。
2. 7.5YR 4/6 褐色 砂質(中程火山灰噴出)
3. 7.5YR 4/4 褐色 黄褐色浮石粒多量混入。



53号土坑

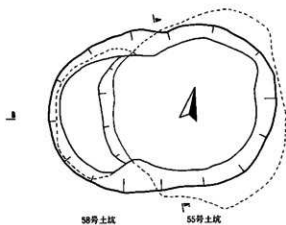
A L=231,200m



1. 7.5YR 2/2 黄褐色 10mm土の黄褐色浮石粒混入。
2. 7.5YR 2/2 暗褐色 1層と同色、黄褐色浮石粒多くなる。
3. 7.5YR 4/4 褐色 砂質、10mm土の黄褐色浮石粒少量混入。
4. 7.5YR 3/1 黒 黒砂を含む、10mm土の黄褐色浮石粒混入。

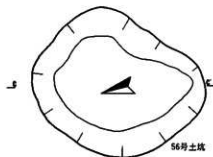
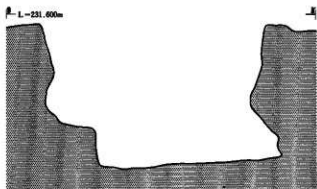
0 1:40 1m

第15図 51・52・53・54号土坑

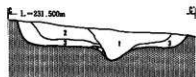


58号土坑

55号土坑



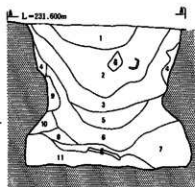
56号土坑



1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質、微量の炭化物混入。
2. 7.5YR 2/1 黒色 黄褐色浮石顆粒混入。
3. 7.5YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石顆粒多量に混入。



61号土坑



55号土坑断面

1. 7.5YR 1.7/1 黒色 炭化物、黄褐色浮石顆粒混入。
2. 7.5YR 2/1 黒色 炭化物、黄褐色浮石顆粒多く混入。
3. 7.5YR 2/2 黒褐色 明褐色火山灰がブロック状に入る。
4. 7.5YR 3/2 黒褐色 3層に比べ火山灰の量が多くなる。
5. 7.5YR 4/4 暗色 粘粒あり、八戸火山灰。
6. 7.5YR 3/1 黒褐色 炭化物混入。
7. 7.5YR 4/4 暗色 粘粒あり、八戸火山灰。
8. 7.5YR 2/2 黒褐色 φ10mm土の黄褐色浮石顆粒多量混入。
9. 7.5YR 2/2 黒褐色 φ10mm土の黄褐色浮石顆粒多量混入。
10. 7.5YR 3/3 暗褐色 粘粒なし、φ10mm土黄褐色浮石顆粒多量混入。
11. 7.5YR 3/3 暗褐色 黄褐色浮石顆粒多量混入。



57号土坑



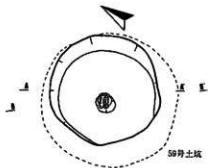
1. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質、粘土、炭化物、砂混入。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂、粘土、炭化物混入。
3. 7.5YR 2/3 暗暗褐色 煤質の粘土混入。
4. 7.5YR 1.7/1 黒色 炭化物混入。



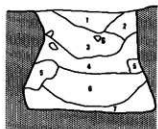
62号土坑



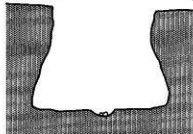
第16図 第55・56・57・58・61・62号土坑



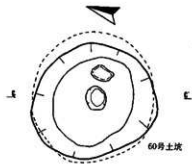
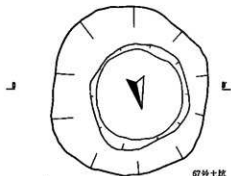
比 L-231.900m



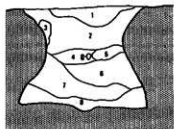
比 L-231.800m



1. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質、炭化物、焼土層最底層。
2. 7.5YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石粒多量混入。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色 大粒の黄褐色浮石粒混入。
4. 7.5YR 2/1 黒色 砂質、炭化物、焼土層。
5. 7.5YR 4/5 褐色 八戸火山灰、しまりが無い。
6. 7.5YR 2/2 黒褐色
7. 7.5YR 4/3 褐色 黄褐色浮石粒少量混入。

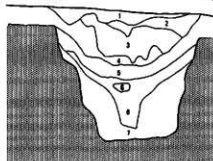


比 L-231.900m



1. 7.5YR 3/1 黒褐色 黄褐色浮石粒少量混入。
2. 7.5YR 2/1 黒色 黄褐色浮石粒少量混入。
3. 7.5YR 5/8 暗褐色 南跡浮石
4. 7.5YR 2/1 黒色 黄褐色浮石粒少量混入。
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 暗褐色土と南跡浮石の混入。
6. 7.5YR 3/1 黒褐色 黄褐色浮石粒少量混入。
7. 7.5YR 3/1 黒褐色 黄褐色浮石粒の混入なし。
8. 7.5YR 2/2 黒褐色 八戸火山灰と南跡浮石の覆土。

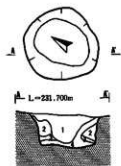
比 L-232.200m



1. 7.5YR 3/1 黒褐色 炭化物、焼土層最底層。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石粒混入。
3. 10YR 4/4 褐色 砂質。
4. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質。
5. 7.5YR 2/3 暗褐色 砂質、 ϕ 10mm以上の黄褐色浮石粒混入。
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 ϕ 30mm以上の黄褐色浮石粒混入。
7. 7.5YR 4/6 褐色 しまりなし、南跡浮石。

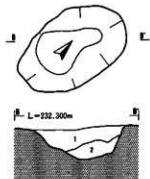
0 1:40 1m

第17図 第59・60・67号土坑



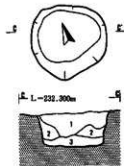
63号土坑

1. 7.5YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石粒少量混入。
2. 7.5YR 6/8 褐色 陶器浮石。
3. 7.5YR 4/4 褐色 粘性あり、かたい。
4. 7.5YR 4/3 褐色 黄褐色浮石粒少量混入。



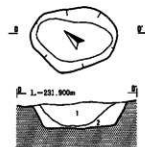
64号土坑

1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質、黄褐色浮石粒多量混入。
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石粒多量混入。



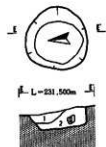
65号土坑

1. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質、黄褐色浮石多量混入。
2. 7.5YR 5/8 暗褐色 南部浮石。
3. 7.5YR 4/4 褐色 黄褐色浮石粒少量混入。



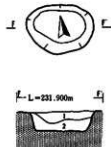
66号土坑

1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質、黄褐色浮石粒多量混入。
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石粒多量混入。



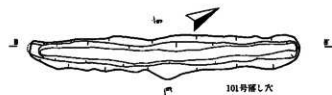
68号土坑

1. 7.5YR 4/4 褐色 黄褐色浮石粒少量混入。
2. 7.5YR 4/3 暗褐色 砂質、炭化物少量混入。

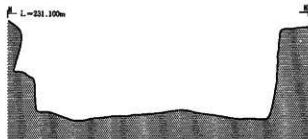


69号土坑

1. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質、黄褐色浮石粒混入。
2. 7.5YR 4/4 褐色 柔らかく、粘性なし。



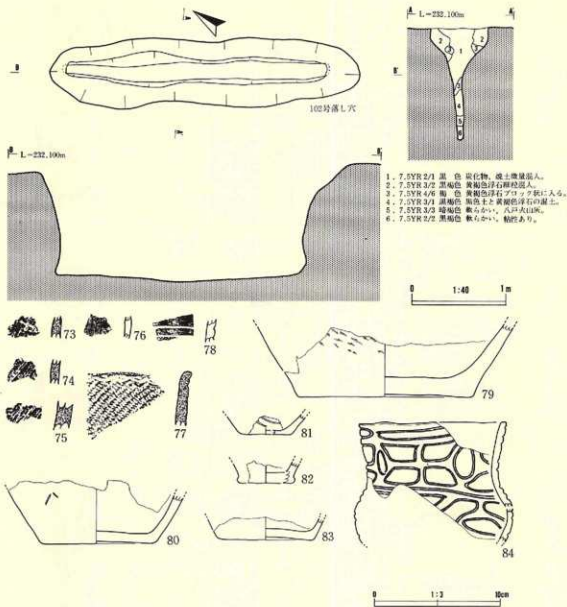
101号落とし穴



1. 7.5YR 1.7/1 黒色 粘性なし、軟らかい。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 軟らかい、黒色土と南部浮石の混入。
3. 7.5YR 5/8 暗褐色 南部浮石の再埋積、軟らかい。
4. 7.5YR 2/2 黒褐色 南部浮石と黒色土、軟らかい。

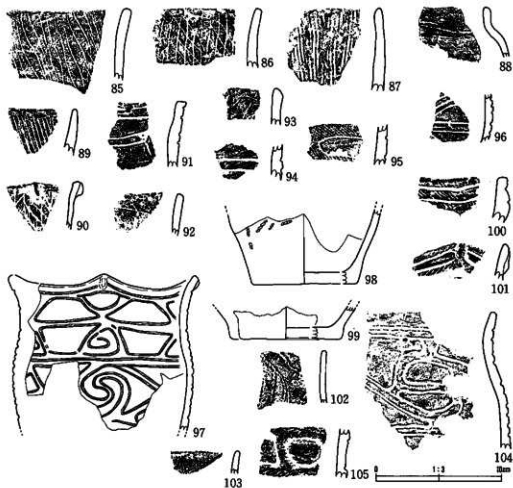


第18図 第63・64・65・66・68・69号土坑・101号落とし穴遺構



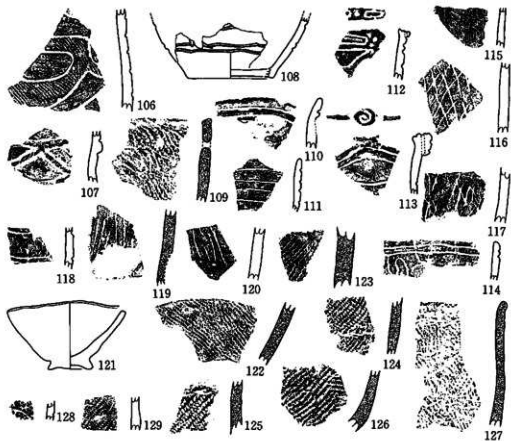
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調整	分類	写真 図録
73	51号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本割漆糸による縦走する漆糸文	ナデ	II群4類	11
74	51号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本割漆糸による縦走する漆糸文	ナデ	II群4類	11
75	51号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本割漆糸による縦走する漆糸文	ナデ	II群4類	11
76	51号土坑、埋土	深鉢	胴部	縦糸漆糸文、薄手	ミダケ	III群4類	11
77	53号土坑、埋土	深鉢	口縁部	連続外179と同一、単筋織文、縦結文	ナデ	II群1類	11
78	54号土坑、埋土	壺	胴部	沈線文、内外面未塗リ	ミダケ	III群4類	11
79	54号土坑、埋土	深鉢	底面	無筋織文	ミダケ	III群4類	10
80	55号土坑、埋土	深鉢	底面	網目状漆糸文	ミダケ	III群4類	13
81	55号土坑、埋土	深鉢	底面	沈線文	ナデ	III群4類	12
82	55号土坑、埋土	深鉢	底面	無文	ナデ	—	12
83	55号土坑、埋土	深鉢	底面	無文、砂粒多量	ナデ	—	12
84	55号土坑、埋土	壺	胴部上平	沈線文、内外面未塗リ	ミダケ	III群6類	10

第19図 102号落とし穴遺構・土坑内出土遺物(1)



番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調査	分類	注記
85	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	先端の広い肥赤文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
86	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	網目状肥赤文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
87	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	条線文、砂粒多、補修孔	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	11
88	55号土坑、埋土	鉢	口縁部	簡文、ミガキ	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
89	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	肥赤文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
90	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	網目状肥赤文、粘層	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
91	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
92	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	斜方向条線文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
93	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	網目状肥赤文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
94	55号土坑、埋土	深鉢	底部	陰帯、単線縄文、沈線文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
95	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、磨沢風文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
96	55号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
97	55号土坑、埋土	鉢	胴部上手	沈線文、粘層、砂粒多	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	10
98	55号土坑、埋土	深鉢	底部	先端の広い肥赤文	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	10
99	55号土坑、埋土	深鉢	底部	簡文、砂粒多	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	12
100	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、充塞縄文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	11
101	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、充塞縄文、粘層	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	12A
102	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	帯状肥赤文	ミガキ	Ⅱ群cⅡ類	12A
103	55号土坑、埋土	鉢	口縁部	肥赤文	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	12A
104	55号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、陰帯、充塞縄文	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	12A
105	55号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、陰帯、充塞縄文	ナデ	Ⅱ群cⅡ類	12A

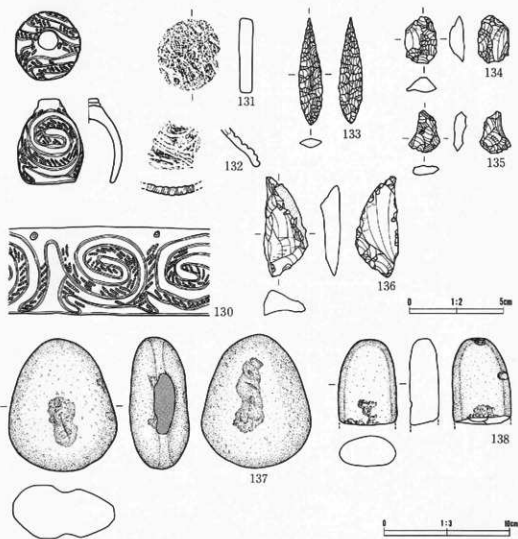
第20図 土坑内出土遺物(2)



1:3 10cm

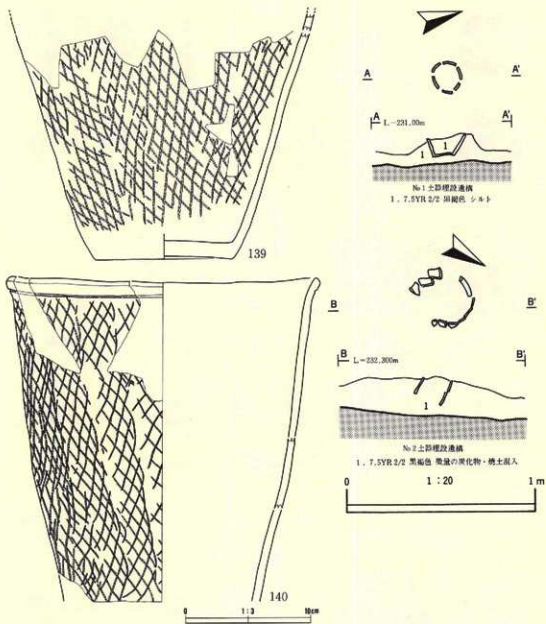
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調査	分類	図説
106	58号土坑、雑土	漆鉢	胴部	比喩文、磨消縄文	ナデ	Ⅱ群C、類	12
107	58号土坑、雑土	漆鉢	胴部	比喩文、磨消、光澤段文	ミガキ	Ⅱ群D、類	12
108	58号土坑、雑土	甕	胴部下半	比喩文、内外面朱塗り	ミガキ	Ⅱ群A、類	13
109	59号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	不整形糸文、種椀孔	ナデ	Ⅱ群F、類	12
110	59号土坑、雑土	甕	口縁部	比喩文	ナデ	Ⅱ群D、類	12
111	59号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	比喩文	ナデ	Ⅱ群D、類	12
112	59号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	比喩文、口唇部比喩、内外面朱塗り	ミガキ	Ⅱ群A、類	12
113	59号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	比喩文、腰袋状突起、内外面朱塗り	ミガキ	Ⅱ群A、類	12
114	59号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	比喩文、内外面朱塗り	ミガキ	Ⅱ群A、類	12
115	59号土坑、雑土	漆鉢	胴部	条縄文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
116	59号土坑、雑土	漆鉢	胴部	横目状横糸文	ミガキ	Ⅱ群D、類	12
117	59号土坑、雑土	漆鉢	胴部	横目状横糸文（無脚）	ナデ	Ⅱ群D、類	12
118	60号土坑、雑土	甕	胴部	比喩文	ミガキ	Ⅱ群D、類	12
119	60号土坑、雑土	漆鉢	胴部下半	磨糸文	ミガキ	Ⅱ群B、類	12
120	61号土坑、雑土	漆鉢	胴部下半	磨糸文	ナデ	Ⅱ群D、類	12
121	62号土坑、雑土	浅鉢	外形	蕉文、手づくね	ナデ	Ⅱ群D、類	13
122	62号土坑、雑土	漆鉢	底面付近	磨糸文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
123	63号土坑、雑土	漆鉢	胴部	貝帯縦縞文、強いミガキ	ナデ	I群F、類	12
124	64号土坑、雑土	漆鉢	胴部	縦縞文、単節縄文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
125	65号土坑、雑土	漆鉢	胴部	縦縞文、単節縄文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
126	66号土坑、雑土	漆鉢	底面付近	単節縄文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
127	67号土坑、雑土	漆鉢	口縁部	磨糸文、不整形糸文	ナデ	Ⅱ群B、類	12
128	68号土坑、雑土	漆鉢	胴部	比喩文	ナデ	Ⅱ群D、類	12
129	101階シ穴状遺構	漆鉢	胴部	単節縄文	ナデ	Ⅱ群D、類	12

第21図 土坑内出土遺物(3)



番号	地点・層位	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真 掲載
130	55号土坑、埋土	埴形土製品		45	34	—	26.8	沈着文、磨削痕文	13
131	55号土坑、埋土	円盤状土製品		40	33	7	12.7	網目状沈着文	13
132	56号土坑、埋土	切欠土器		—	—	—	—	沈着文	13
番号	地点・層位	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真 掲載
133	51号土坑、埋土	石鏃	凝灰岩質硬質泥岩	57	12	6	2.7		14
134	55号土坑、埋土	不定形石器	チャート	24	16	8	3.0		14
135	62号土坑、埋土	不定形石器	凝灰岩質硬質泥岩	22	15	6	1.3		14
136	62号土坑、埋土	不定形石器	チャート	53	23	11	12.8		13
137	62号土坑、埋土	磨石目	凝灰岩質砂岩	196	87	49	470		15
138	62号土坑、埋土	磨石目	硬砂岩	160	47	24	123		15

第22図 土坑内出土遺物(4)



番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面測数	分 割	片数 / 面数
139	第1号埋設土器	深鉢		網目状赤土文	ナデ	山形4葉	16
140	第2号埋設土器	深鉢		網目状赤土文	ナデ	山形4葉	16

第23図 土器埋設遺構・埋設土器

V. 遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外から出土した遺物は、土器・土製品・石器・石製品等である。土器は、コンテナで(46×37×30cm)で約1箱分が得られている。縄文時代早期～後期の土器が出土している。そのなかでも、主体を占めるのは縄文時代前期と後期の土器である。石器は60点出土しており、大多数は礫石器である。

1. 土器

文様の特徴・施文技法・胎土の特徴などから大きくⅢ群に分類した。概ね第Ⅰ群とした土器群は縄文時代早期、第Ⅱ群とした土器群は縄文時代前期、第Ⅲ群とした土器群は縄文時代後期に相当する。識別個体を増やし、分類の蓋然性を高めるために、遺構内から出土した土器も含めて分類を行った。

第Ⅰ群土器

ここでは、縄文時代早期に属すると思われる土器群を一括した。第Ⅱ層を中心に出土している。次のように細分した。

- a類：貝殻条痕文が施文されているもの
- b類：間隔の広い貝殻腹縁文が施文されているもの
- c類：貝殻連続腹縁圧痕文と刺突文が施文されているもの
- d類：貝殻腹縁による押し引きがみられるもの
- e類：無文のもの

第Ⅰ群a類 (第24図141、写真図版11-17)

141は胴部下半である。器表面には貝殻による条痕文が施文され、裏面には粗いナデ調整がなされている。胎土に少量の植物性繊維と石英を含み、焼成は良く堅く緻密である。色調はよい黄褐色を呈し、器壁の厚さは9mmほどである。

第Ⅰ群b類 (第24図123・142、写真図版17)

間隔の広い貝殻腹縁圧痕文が斜位あるいは縦位に施文され、裏面はナデ調整されている。特に123は、器表面に強いミガキがかけられている。胎土には少量の植物性繊維と石英、黄褐色浮石粒を含み、焼成は良く堅く緻密である。色調は両者ともによい黄褐色、裏面は褐灰色を呈し、器壁の厚さは12mmほどである。

第Ⅰ群c類 (第24図143・144・146・147、写真図版17)

143・144は同一個体の口縁部と胴部である。口縁部は外傾し、波状を呈するものとおもわれ

る。口唇部は平坦に調整され外側に向かって傾斜し、外端には刻目が施されている。口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁連続波状丘痕文が施文され、更に胴部には棒状工具により上方に向けて斜めの刺突が加えられている。内面はナデ調整されている。胎土には少量の植物性繊維と石英、沼鉄を含み、焼成は良く堅く緻密である。色調は表裏面とも黒褐色を呈し、器壁の厚さは8mmほどである。146・147は同一個体の胴部である。表面には、腹縁の平滑な貝殻により貝殻腹縁連続丘痕文が施文され、それより下立は無文となっている。内面はナデ調整されている。胎土には、少量の植物性繊維と砂、比較的多量の金雲母が含まれている。焼成は良く、堅く緻密である。色調は表裏面ともいふい赤褐色を呈し、器壁の厚さは7mmほどである。

第I群d類 (第24図125、写真図版17)

表面には貝殻腹縁押し引き文を施文した後に、貝殻腹縁連続波状丘痕文が施文されている。内面はナデ調整されている。胎土には少量の植物性繊維・砂・沼鉄を含み、焼成は良好である。色調は表裏面ともいふい黒褐色を呈し、器壁の厚さ11mmほどである。

第I群e類 (第24図148、写真図版17)

胴部下半～尖底部付近である。表面は無文であるが、強いミガキが加えられている。内面にはナデ調整がなされている。胎土には少量の植物性繊維、砂を含み、焼成は良好で堅く緻密である。色調は外面がにい褐色、裏面は黒褐色を呈し、器壁の厚さは12mmほどである。a～d類のいずれかに伴う土器と思われるが、胎土・色調はb類に最も近似する。

第II群土器

ここでは、縄文時代前期に属すると思われる土器群を一括した。主に第II層を中心にして出土している。胎土には全て植物性繊維が含まれ、器表面には縄文あるいは絡糸体による燃糸文が施文されている。施文される縄文と燃糸文の違いにより次のように細分した。

- a類：地文に単節斜行縄文が施文されるもの
- b類：地文に複節斜行縄文が施文されるもの
- c類：地文に地文に0段多条の原体より単節斜行縄文が施文されるもの
- d類：地文に羽状縄文が施文されるもの
- e類：地文に綾絡文が施文されるもの
- f類：地文に不整燃糸文が施文されるもの
- g類：一部で重複するが基本的には縦位の燃糸文が施文されるもの
- h類：原体の回転方向を変化させ、交差した燃糸文が施文されるもの

第II群a類 (第24図3・149~162、写真図版11・17)

口縁部破片6点、底部破片1点、その他は胴部の破片である。150・151、152・153は同一個体である。口縁部は全て直立している。口唇部の形状は丸みをもつ3・149・150のもの、平坦に仕上げられ外側に向かってやや傾斜する152・153のもの、内削ぎの形状を示す154のものが見られる。3・150の口唇部には、原体による側面圧痕が施文されている。地文に単節斜行縄文が施文されるのが基本となっているが、3・149は口唇直下に横走する単節縄文が施文され、文様帯が構成されている。153・155は単純な斜行縄文ではなく、原体の回転方向を変化させて文様表出を意識した施文方法を行っている。162は平底の底部である。底部外面にも胴部と同じ原体により斜行縄文が施文されている。上げ底風を呈し、底部はやや外側に突き出ている。158~161は丸底ないし尖底を呈すると思われる底部破片である。

胎土には少量の植物性繊維、石英を含み、焼成は良く堅く緻密である。色調は黒褐色のものが数点あるが、ほとんどのものにはぶい褐色を呈する。器壁の厚さは薄手のものもあるが、平均8mmほどである。

第II群b類 (第25図7・163~170、写真図版11・17)

口縁部破片4点、胴部破片4点、底部付近の破片1点である。口縁部はほぼ直立し、口唇部は全て平坦に仕上げられている。口唇部は外側に向かって傾斜する7・163・164のものと外削ぎの形状を示す165のものがある。全て器表面には複節の斜行縄文が施文され、裏面は166を除きナデ調整がなされている。166は裏面にかすかな条痕文が観察される。165には明瞭に原体の末端処理が残っている。170は丸底~尖底をなすと思われる底部付近である。胎土には少量の植物性繊維、小礫を含み、焼成は良く堅く緻密である。色調は橙色のものがおおいが、少量は黒褐色を呈するものも見られる。器壁の厚さは胴部で7~9mm、底部付近のもので14mm程度ある。

第II群c類 (第25図40・171~176、写真図版11・17)

口縁部破片1点、胴部破片4点、底部付近の破片2点である。173・174、175・176は同一個体である。40はほぼ直立する口縁部で、口唇部は丸みをもっている。171は原体の回転方向を変化させている。171は胎土に少量の植物性繊維と沼鉄が含まれ、焼成は良く堅く緻密である。色調は黒褐色を呈し、器壁の厚さは胴部で5~7mmである。172~176は胎土に多量の植物性繊維が含まれ、焼成はあまり良くない。器壁は14mmと非常に厚いが脆い。色調にはぶい黄褐色を呈するものが多い。174・175は丸底を呈すると思われる底部付近の破片である。器壁の厚さは14mm程度である。

第II群d類 (第25図8・41、写真図版11)

2点とも胴部の破片である。結束のない0段多条の原体を用い、回転方向を変化させて羽状縄文を作り出している。胎土に少量の植物性繊維と小礫・金雲母を含み、焼成は比較的良好で

ある。色調は褐色を呈し、器壁の厚さは7mmほどである。

第II群 e類 (第25図64・124・125・128・177・178、第26図179、写真図版11・12・16・17)

口縁部破片3点、胴部破片3点である。64と177は同一個体である。179は、尖底をなす深鉢形土器である。口縁部は直線的に外傾しており、口唇部にいたって外端が外側に突き出ている。口唇部は平滑に仕上げられ、外側に向かって傾斜している。口縁部直下及び胴部上半に1条単位の綾格文が約4cm間隔で3条施文され、これが同時に文様帯を区画している。1～3段目にかけては単節斜行縄文が施文され、3段目の途中から胴部下半にかけては細い燃糸文が回転方向を変化させて施文されている。これより下位は再び単節斜行縄文と燃糸文が繰り返される。胎土には少量の植物性繊維を含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈し、器壁の厚さは10mmほどである。64は緩く外反する口縁部を持ち、丸みのある口唇部に至って外端が外側に突き出している。口縁部には横走る4条の綾格文、胴部には2条1組の綾格文が約3cmほどの間隔をもって数段施文されている。内面はナゲ調整されている。底部の形状は不明である。胎土には少量の植物性繊維と沼鉄を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈し、器壁の厚さは7mmほどである。128は64と類似した口縁部の形状を示している。不整の燃糸文を地文としている。e類とした土器の胎土は一般に少量の植物性繊維を含み、焼成は比較的良好である。色調はにぶい黄褐色のものが多く、器壁は平均7mm前後である。

第II群 f類 (第26図109・181・182、写真図版12・16・17)

3点とも口縁部まで形状を知りうる破片である。181は尖底をなすと思われる深鉢形土器の胴部上半である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は内側に突き出している。口唇部には原体の側面圧痕が施文されている。横走る不整燃糸文が施文された口縁部文様帯をもち、胴部文様には斜位の燃糸文が施文されている。裏面には、口縁部文様帯に相当する部分にはナゲ調整、それより下には条痕が施されている。胎土には多量の植物性繊維と黄褐色浮石粒が含まれており、焼成は良好とはいえず非常に脆い。色調は外面の上半は黒褐色、下半は淡赤褐色を呈する。器壁の厚さは13mm前後である。109はほぼ直立する口縁部である。口唇部は平坦に仕上げられ、内側に傾斜している。外端の部分は、外側に突き出している。胎土には多量の植物性繊維と黄褐色浮石粒が含まれており、焼成は良く堅く緻密である。黒褐色を呈し、器壁の厚さは8mm前後である。180はほぼ直立した口縁部をもつ深鉢形土器である。口唇部は平坦に仕上げられている。胎土には少量の植物性繊維と黄褐色浮石粒・小礫が含まれている。焼成は良く堅く緻密である。黒褐色を呈し、器壁の厚さは7mm前後である。

第II群 g類 (第26図122・182～187、写真図版12・17)

口縁部破片1点、丸底～尖底をなすと思われる底部破片2点、他は胴部の破片である。183は、ほぼ直立する口縁部である。口唇部には原体の側面圧痕が施文されている。胎土に多量の植物

性繊維を含み、焼成は不良で脆い。明褐色を呈し、器壁の厚さは10mm前後である。122は尖底をなすと思われる底部付近である。胎土には少量の植物性繊維を含み、焼成は良く堅く緻密である。にぶい橙色を呈し、器壁の厚さは8mm前後である。182・183は胎土に多量の植物性繊維と黄褐色浮石粒が含まれ、焼成は不良で非常に脆い。黄褐色～褐灰色を呈し、器壁の厚さは13～7mm前後である。施文される燃糸文には条間の広いものや密なものがある。

第II群h類 (第27図73～75・188～194、写真図版11・17)

底部付近の破片1点を除き他は胴部破片である。188・191は胎土に少量の植物性繊維と微量の沼鉄を含んでいる。焼成は良好で堅く緻密である。にぶい黄橙色を呈し、器壁の厚さは7mmほどである。189・190・192・194は、胎土に多量の植物性繊維と微量の黄褐色浮石を含む。焼成は不良で非常に脆い。色調は浅黄橙～橙色を呈する。器壁の厚さは10mm前後である。193・194は網目状燃糸文が施文されている。73～75は同一個体であり、燃糸文が施文されている。橙色を呈し、器壁の厚さは5mm前後である。

第III群土器

ここでは、縄文時代後期に属すると思われる土器群を一括した。遺構内から出土した土器が多く、遺構外では主に第I層から出土している。完形及び全容を知りえた土器が少ないため、分類に際しては器種について配慮しなかった。各類は細部の施文技法の相違により細分される。

a類：沈線文だけで文様が構成され縄文が一切施文されないもの

b類：沈線文と隆帯により文様が構成されるもの

c類：沈線文と縄文だけで文様が構成されるもの

d類：地文のみによるもの

e類：縄文時代後期に帰属すると思われるが、その詳細が不明なもの

第III群 a₁類 (第27図21・23・91・112・113・195・198・199、写真図版11・12・18)

沈線文により弧状・方形・曲線状の文様が施文される土器。波状口縁を呈する鉢形土器が多いようである。波状の頂部や円弧状の中心部に突起や貼瘤をもつもの、口唇部に沈線文が施文されたものもある。胎土は概して良く、内外面に朱塗りが施されたものもある。

第III群 a₂類 (第27図104・114・196・197、写真図版12・18)

平行沈線文・入組み状の沈線文によって文様が施文される土器。平縁の鉢形土器がある。胎土には砂粒が混じる。

第III群 b₁類 (第27図200、写真図版18)

隆帯と沈線文により文様が構成されている。

第Ⅲ群 b₁ 類 (第27図105・107・201、写真図版12・18)

隆帯と沈線文により文様が構成され、その間に充填縄文が施文されている。沈線文により描かれる文様要素には円弧文、方形区画文がある。

第Ⅲ群 b₂ 類 (第27図26、写真図版11)

隆帯と沈線文により文様が構成され、その間が磨り消されるもの。波状口縁を呈し、口唇部は肥厚している。隆帯により口縁部文様帯が形成され、地文は単節斜行縄文が施文されている。

第Ⅲ群 c₁ 類 (第28図25・62・100・101、写真図版11・12)

沈線文と充填縄文により文様が構成されるもの。沈線文は弧状及び曲線文である。波状口縁、平縁のものもある。波状の頂部に貼瘤の付されるものもある。

第Ⅲ群 c₂ 類 (第28図63・202、写真図版11・18)

沈線文と磨消縄文により文様が構成されるもの。沈線文は曲線文をなしている。

第Ⅲ群 d₁ 類 (第28図88・101・111・203～206、写真図版11・12・18)

全く文様が施文されないもの、無文地に数条の沈線文が施文されるもの。壺形土器に多く、内外面に朱塗りが施されるものもある。

第Ⅲ群 d₂ 類 (第28図35・86・90・207・208、写真図版11・18)

地文として網目状燃糸文が施文されるもの、折り返し口縁をもつもの、さらに小波状の頂部に貼瘤をもつものもある。

第Ⅲ群 d₃ 類 (第28図87、写真図版11)

地文として条線文が施文されるもの。使用される施文具により条線の太さ、深淺には各種見られる。また、条線を使用して網目状燃糸文を模倣した施文方法をとるものもある。

第Ⅲ群 d₄ 類 (第28図102、写真図版12)

地文として原体の側面疳が施文されるもの。1点出土しており、器壁は非常に薄い。

第Ⅲ群 d₅ 類 (第28図28・85、写真図版11)

地文として条の間隔の広い縦位の燃糸文が施文されるもの。28はさらに口唇部直下に側面疳を持つとともに貼瘤も付されている。

第Ⅲ群 d₆ 類 (第28図209～211、写真図版18)

地文として斜行縄文が施文されるもの。とくに212は口唇部に内外から刻目がある。

第Ⅲ群 d₇ 類 (第28図212～214、写真図版18)

小破片のため内容は不明である。胎土、色調などから一応第Ⅲ群の部類として取り扱う。212は無文地に横方向の刺突が加えられている。213は地文として縦方向の燃糸文が見られ、刺突とは異なるが横方向に楕円形状の凹みが並んでいる。214は両面から複数の穿孔が認められる底部破片である。

2. 石器

主体を占めるのは遺構外から出土している礫石器である。一部は遺構内から出土している石器も含めて分類を行う。

(1) 石鏃 (第29図215～217、写真図版18)

ここでは、先端部が先鋭になっており、刺突を主目的として使用したと考えられる石器を一括した。形状の違いにより次のように分類した。

a類：基部を持ち基部に挿入にのがあるもの (215)

b類：基部を持ち基部が突出するもの (216)

c類：基部を持たず基部が尖～円味を帯びるもの (217)

(2) 石匙 (第29図219・220、写真図版18)

ここでは、両側辺から挟りを入れてつまみ部を作り出した石器を一括した。2点出土しており、両者とも縦長の形態を示すものである。219は3縁辺で構成され、先端部は平坦な形態を示している。220は3縁辺で構成され、先端部は平坦な形態を示している。

(3) 不定形石器 (第29図218・221～223、写真図版18)

ここでは、上述の石鏃・石匙を除く調整痕のある剥片石器を一括した。明瞭な刃部、調整痕を持つ部位により次のように分類した。

a類：剥片の1縁辺に調整痕のあるもの (222)

b類：剥片の2縁辺に調整痕のあるもの (221・223)

c類：剥片の3縁辺に調整痕のあるもの

d類：周縁に調整痕があるもの (218)

(4) 磨製石斧 (第30図225、写真図版19)

1点出土している。研磨された石斧である。基部及び側縁、背面は欠損している。

(5) 磨石類 (第30～33図、写真図版19～21)

ここでは、円礫の一部に凹部分、研磨部分、敲打部分をもつ石器を一括した。大部分の磨石類は前述の三要素が複合しており、各要素の組み合わせにより以下のように細分した。

磨石Ⅰ類：礫面の平坦部分に凹部を形成している。通常は2面のものが多いが、希に3面に見られるものもある

磨石Ⅱ類：凹部と研磨部分のみられるもの

磨石Ⅲ類：研磨面のみられるもの

磨石Ⅳ類：研磨面・敲打面のみられるもの

磨石Ⅴ類：凹部・研磨面・敲打面のみられるもの

(6) 礫石垂 (第33図248・249、写真図版21)

2個一對の挟入を有する礫石器で、円形または楕円形の偏平な小形の自然石が使われている。

(7) 礫器 (第33図250、写真図版21)

礫の一部に打撃を加え、簡単な加工を加えたもの

(8) 礫石 (第33図251・252、写真図版21)

偏平で長方形の形状を示し、研磨面あるいは擦痕のみられるもの。

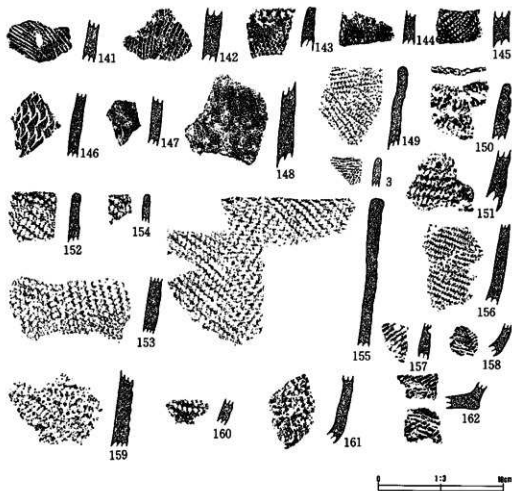
(9) 石皿類 (第8図10・11、写真図版14)

敲打あるいは研磨により周縁が整形され、平坦な磨面のあるもの。

3. 石製品

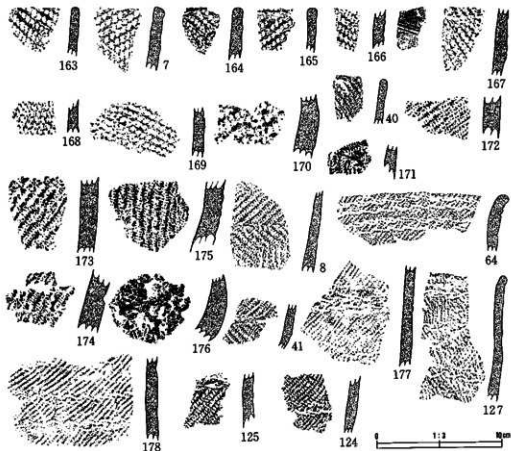
(1) 棒状石製品 (第29図224、写真図版18)

全面が研磨され、断面は円柱状で先端部及び基部には刃部が形成されている。



番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内部状態	分類	数量
141	遺構外、II層	漆器	胴部	貝殻垂珠文、胎土密	ナデ	I群A類	17
142	遺構外、II層	漆器	胴部	貝殻連続線状庄直文	ナデ	I群B類	17
143	遺構外、II層	漆器	口縁部	口縁部割目、貝殻連続線状庄直文	凹凸	I群C類	17
144	遺構外、II層	漆器	胴部	上方に向けた斜位の割目	凹凸	I群C類	17
145	遺構外、I層	漆器	胴部	貝殻連続線状庄直文、貝殻割目押し引き文	凹凸	I群D類	17
146	遺構外、II層	漆器	胴部	貝殻連続線状庄直文、全管母痕入	凹凸	I群E類	17
147	遺構外、II層	漆器	胴部	貝殻連続線状庄直文、無文	凹凸	I群E類	17
148	遺構外、II層	漆器	胴部	無文	1ダキ	I群F類	17
149	遺構外、II層	漆器	口縁部	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
150	遺構外、II層	漆器	口縁部	単筋縄文、口唇部単体庄直	ナデ	II群A類	17
151	遺構外、II層	漆器	胴部	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
3	2号住居跡、床	漆器	口縁部	単筋縄文、口唇部単体庄直	ナデ	II群A類	11
152	遺構外、II層	漆器	胴部	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
153	遺構外、II層	漆器	胴部	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
154	遺構外、II層	漆器	口縁部	単筋縄文、小椀舌	ナデ	II群A類	17
155	遺構外、II層	漆器	口縁部	単筋縄文、回転方向変化で羽状	凹凸	II群A類	17
156	遺構外、II層	漆器	胴部	単筋縄文、小椀舌	凹凸	II群A類	17
157	遺構外、II層	漆器	胴部	単筋縄文、完全穿孔、途中穿孔	ナデ	II群A類	17
158	遺構外、II層	漆器	底部付皮	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
159	遺構外、I層	漆器	底部付皮	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
160	遺構外、I層	漆器	底部付皮	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
161	遺構外、I層	漆器	底部付皮	単筋縄文	ナデ	II群A類	17
162	遺構外、II層	漆器	底部	単筋縄文	ナデ	II群A類	17

第24図 遺構外出土遺物(1)



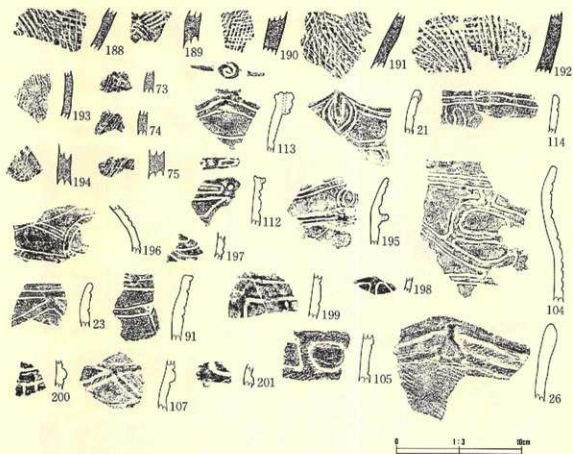
番号	地点・部位	器種	部位	文様の特徴・備考	内部調査	分類	数量
163	遺構外、I層	漆鉢	口縁部	複線縄文、砂粒含	凹凸	II群b類	17
7	2号住居跡、床	漆鉢	口縁部	複線縄文、小罅含	ナデ	II群b類	11
164	遺構外、I層	漆鉢	口縁部	複線縄文、砂粒含	ナデ	II群b類	17
165	遺構外、I層	漆鉢	口縁部	複線縄文、砂粒含、原形未確定	ナデ	II群b類	17
166	遺構外、II層	漆鉢	胴部	複線縄文	条痕	II群b類	17
167	遺構外、II層	漆鉢	胴部	複線縄文	ナデ	II群b類	17
168	遺構外、II層	漆鉢	胴部	複線縄文、砂粒含	凹凸	II群b類	17
169	遺構外、II層	漆鉢	胴部	複線縄文	ナデ	II群b類	17
170	遺構外、II層	漆鉢	底面付近	複線縄文、石灰含	凹凸	II群c類	17
40	3号住居跡、壇土	漆鉢	口縁部	0段多条	ナデ	II群c類	11
171	遺構外、I層	漆鉢	胴部	0段多条	凹凸	II群c類	17
172	遺構外、I層	漆鉢	胴部	0段多条	ナデ	II群c類	17
173	遺構外、II層	漆鉢	胴部	0段多条	凹凸	II群c類	17
174	遺構外、II層	漆鉢	底面付近	0段多条	凹凸	II群c類	17
175	遺構外、II層	漆鉢	胴部	0段多条	凹凸	II群c類	17
176	遺構外、II層	漆鉢	底面付近	0段多条	凹凸	II群c類	17
8	2号住居跡、床	漆鉢	胴部	非線形羽状縄文(0段多条)金環母合	ナデ	II群b類	11
41	3号住居跡、壇土	漆鉢	胴部	非線形羽状縄文(0段多条)金環母合	ナデ	II群d類	11
64	4号住居跡、壇土	漆鉢	口縁部	線結文、単線縄文	ナデ	II群b類	11
177	4号住居跡、壇土	漆鉢	胴部	線結文、単線縄文	ナデ	II群c類	17
127	6号土坑、壇土	漆鉢	口縁部	線結文、非線形点文	ナデ	II群c類	17
178	遺構外、II層	漆鉢	胴部	線結文、単線縄文	ナデ	II群c類	17
125	6号土坑、壇土	漆鉢	胴部	線結文、単線縄文	ナデ	II群c類	12
124	6号土坑、壇土	漆鉢	胴部	線結文、単線縄文	ナデ	II群c類	12

第25図 遺構外出土遺物(2)



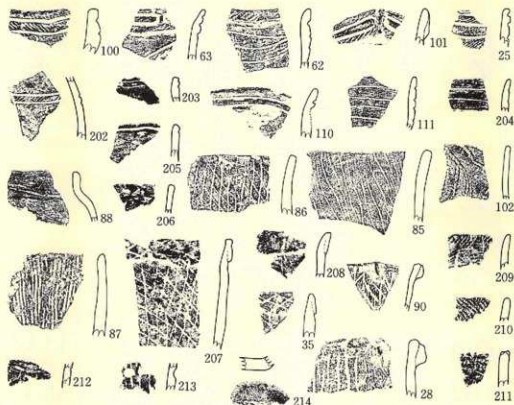
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面図	分幅	高さ
179	遺構外、I層	漆鉢	胴部上手	綾織文、華嚴織文、惣糸文クロス	ナデ	11釐×8釐	16
109	59号土坑、埋土	漆鉢	口縁部	不整惣糸文、縫持孔	ナデ	11釐×8釐	12
180	遺構外、II層	漆鉢	口縁部	不整惣糸文	ナデ	11釐×8釐	17
181	遺構外、II層	漆鉢	胴部上手	不整惣糸文(横走、斜走)	糸織	11釐×8釐	16
182	遺構外、II層	漆鉢	口縁部	縦走する惣糸文、口唇部解持片残痕	四心	11釐×8釐	17
183	遺構外、II層	漆鉢	胴部	縦走する惣糸文、縫持孔	四心	11釐×8釐	17
184	遺構外、II層	漆鉢	胴部	縦走する惣糸文、紗包含	四心	11釐×8釐	17
122	62号土坑、埋土	漆鉢	胴部附近	惣糸文	ナデ	11釐×8釐	12
185	遺構外、II層	漆鉢	胴部	惣糸文	四心	11釐×8釐	17
186	遺構外、I層	漆鉢	胴部	惣糸文、石裏含	割織	11釐×8釐	17
187	遺構外、I～II層	漆鉢	胴部附近	惣糸文	四心	11釐×8釐	17

第26図 遺構外出土遺物(3)



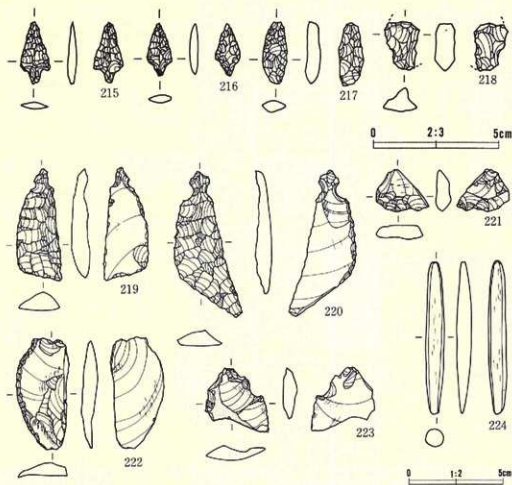
番号	地点・層位	形類	部位	文様の特長・備考		内面調査	分類	図版
188	遺構外、I層	深鉢	胴部	梵文クロス		凹凸	II群b類	17
189	遺構外、II層	深鉢	胴部	梵文		ナデ	II群b類	17
190	遺構外、II層	深鉢	胴部	梵文		凹凸	II群b類	17
191	遺構外、II層	深鉢	胴部	梵文		凹凸	II群b類	17
192	遺構外、II層	深鉢	高部付足	梵文		凹凸	II群b類	17
193	遺構外、II層	深鉢	胴部	4本筋梵文による網目状梵文		ナデ	II群b類	17
194	遺構外、II層	深鉢	胴部	2本筋梵文による網目状梵文		ナデ	II群b類	17
73	54号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本筋梵文による縦走する梵文	同一様式	ナデ	II群b類	11
74	54号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本筋梵文による縦走する梵文		ナデ	II群b類	11
75	54号土坑、埋土	深鉢	胴部	数本筋梵文による縦走する梵文		ナデ	II群b類	11
113	59号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、縦波状突起、内外面束盛り		エダキ	III群a類	12
112	59号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、口唇部沈線、内外面束盛り	エダキ	III群a類	12	
21	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文、頂部に貼附	エダキ	III群a類	11	
195	遺構外、I層	鉢	口縁部	沈線文、沈線文	エダキ	III群a類	18	
114	59号土坑、埋土	鉢	口縁部	沈線文、内外面束盛り	エダキ	III群a類	12	
196	遺構外、I層	鉢	胴部	沈線文	ナデ	III群a類	18	
104	58号土坑、埋土	鉢	口縁部	沈線文	ナデ	III群a類	12	
197	遺構外、I層	盃	胴部	沈線文、斜紋合	ナデ	III群a類	18	
198	遺構外、I層	盃	胴部	沈線文、斜紋合	ナデ	III群a類	18	
23	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	沈線文	エダキ	III群a類	11	
91	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文	エダキ	III群a類	11	
199	遺構外、I層	深鉢	胴部	沈線文、内外面束盛り	エダキ	III群a類	18	
200	遺構外、I層	深鉢	胴部	沈線文、隆帯	エダキ	III群b類	18	
107	58号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、隆帯、光澤文	エダキ	III群b類	12	
201	遺構外、I層	深鉢	胴部	沈線文、隆帯、光澤文	エダキ	III群b類	18	
105	58号土坑、埋土	深鉢	胴部	沈線文、隆帯、光澤文	ナデ	III群b類	12	
26	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	隆帯、沈線文	エダキ	III群b類	11	

第27図 遺構外出土遺物(4)



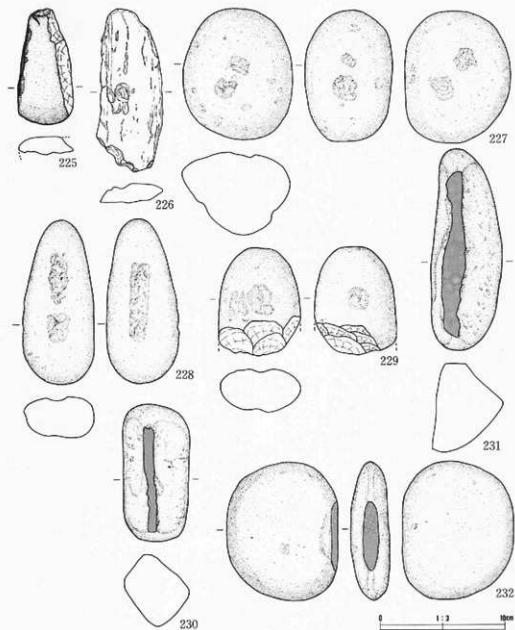
番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面装飾	分類	写真 図番
100	58号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、北東端文	ミガキ	Ⅱ群c, 類	11
63	4号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、隆帯、帯状刺文	ミガキ	Ⅱ群c, 類	11
62	4号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、帯状刺文	ミガキ	Ⅱ群c, 類	11
101	58号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文、北東端文、粘附	ミガキ	Ⅱ群c, 類	12
25	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	沈線文、北東端文	ミガキ	Ⅱ群b, 類	11
202	遺構外、I層	深鉢	胴部	沈線文、帯状刺文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
203	遺構外、I層	深鉢	口縁部	沈線文、砂粒多	ミガキ	Ⅱ群d, 類	18
110	59号土坑、埋土	盃	口縁部	沈線文	ナデ	Ⅱ群d, 類	12
111	59号土坑、埋土	深鉢	口縁部	沈線文	ナデ	Ⅱ群d, 類	12
204	遺構外、I層	深鉢	口縁部	沈線文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
88	55号土坑、埋土	盃	口縁部	無文、ミガキ	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
205	遺構外、I層	盃	口縁部	沈線文	ミガキ	Ⅱ群d, 類	18
206	遺構外、I層	鉢	口縁部	無文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
86	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	網目状刺糸文	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
85	56号土坑、埋土	深鉢	口縁部	帯状の広い刺糸文	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
102	58号土坑、埋土	深鉢	口縁部	帯状刺文	ミガキ	Ⅱ群d, 類	12
87	55号土坑、埋土	深鉢	口縁部	糸線文、砂粒多、補修孔	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
207	遺構外、I層	深鉢	口縁部	網目状刺糸文、折り返し口縁	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
208	遺構外、I層	深鉢	口縁部	網目状刺糸文、折り返し口縁	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
35	3号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状刺糸文、折り返し口縁	ナデ	Ⅱ群d, 類	11
90	55号住居跡、埋土	深鉢	口縁部	網目状刺糸文、粘附	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
28	3号住居跡、埋土	鉢	口縁部	帯状刺文、帯状の広い刺糸文、粘附	ミガキ	Ⅱ群d, 類	11
209	遺構外、I層	盃	口縁部	単線部行刺文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
210	遺構外、I層	深鉢	口縁部	単線部行刺文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
211	遺構外、I層	深鉢	口縁部	単線部行刺文	ナデ	Ⅱ群d, 類	18
212	遺構外、I層	深鉢	胴部	帯状方向刺文	ナデ	Ⅱ群	18
213	遺構外、I層	深鉢	胴部	刺糸文、帯状刺文刺刺痕	ナデ	Ⅱ群	18
214	遺構外、I層	深鉢	底部	深数穿孔	ナデ	Ⅱ群	18

第28図 遺構外出土遺物(5)



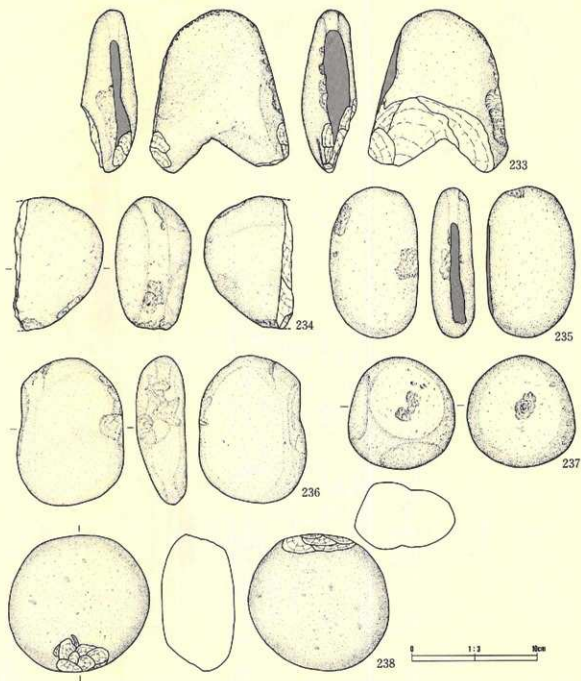
番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真 位置
215	遺構外、I層	石鏃	チャート	21	12	3	0.6		18
216	遺構外、II層	石鏃	輝灰燧灰岩	21	19	3	0.5		18
217	遺構外、II層	石鏃	凝灰質硬質頁岩	24	9	5	1.1		18
218	遺構外、II層	不定形石器	輝綠凝灰岩	19	14	8	2.2		18
219	遺構外、II層	石鏃	凝灰質硬質頁岩	58	23	9	10.8		18
220	遺構外、II層	石鏃	注貫地層凝灰岩	75	27	9	15.3		18
221	遺構外、I層	不定形石器	消波岩質粗細砂	22	26	8	4.6		18
222	遺構外、I層	不定形石器	凝灰質硬質頁岩	59	27	7	12.5		18
223	遺構外、I層	不定形石器	凝灰質硬質頁岩	26	33	7	8.2		18
224	遺構外、II層	棒状石製品	粉砂岩	83	9	10	19.7		18

第29図 遺構外出土遺物(6)



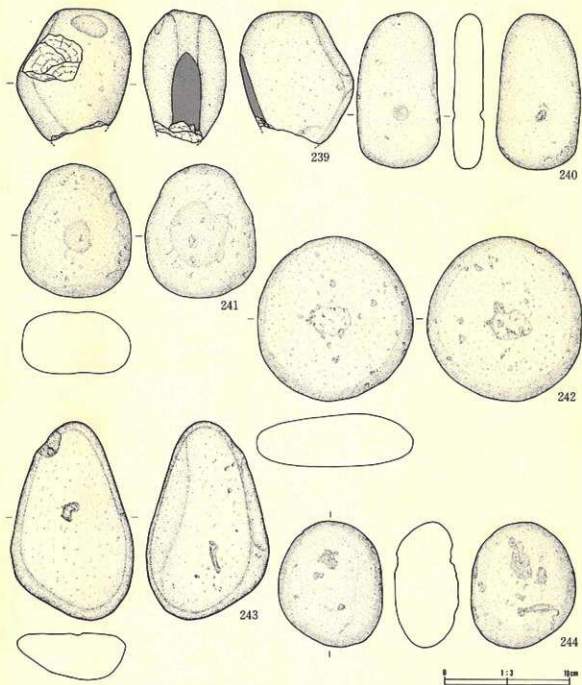
番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(克)	備	考	図説
225	遺構外、II層	磨製石種	燧石	93	44	17	73			19
226	遺構外、II層	磨石 I	千枚岩	139	50	16	132			19
227	遺構外、II層	磨石 I	安山岩	104	87	68	648			19
228	遺構外、II層	磨石 II	燧石	131	57	35	356			19
229	遺構外、II層	磨石 II	凝灰質砂岩	96	65	35	268			19
230	遺構外、II層	磨石 III	燧石	119	51	44	445			19
231	遺構外、II層	磨石 III	燧石	161	57	73	288			19
232	遺構外、II層	磨石 III	燧石	111	89	33	482			19

第30図 遺構外出土遺物(7)



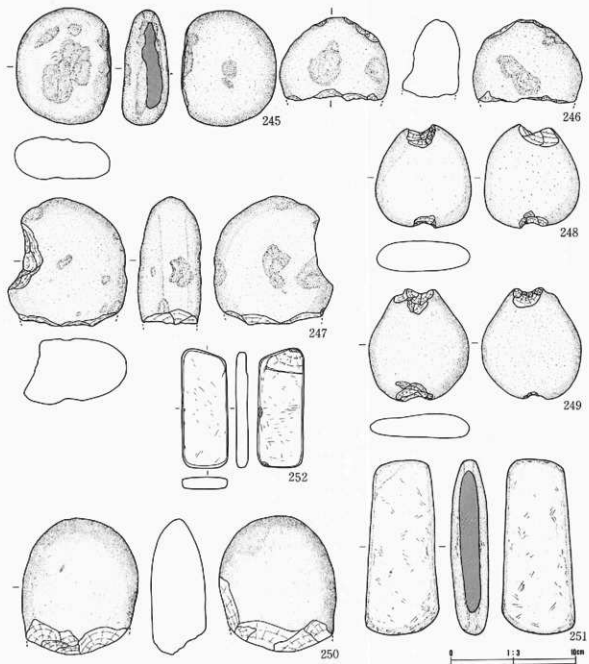
番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備	考	写真 図版
233	遺構外、II層	磨石IV	硬砂岩	129	107	43	600			19
234	遺構外、II層	磨石IV	硬砂岩	106	(70)	58	582			20
235	遺構外、I層	磨石IV	硬砂岩	121	71	34	391			20
236	遺構外、II層	磨石IV	硬砂岩	117	86	39	560			20
237	遺構外、II層	磨石II	硬砂岩	96	85	57	486			20
238	遺構外、I層	磨石IV	瀬灰質硬砂岩	132	110	58	1,117			20

第31図 遺構外出土遺物(8)



番号	地点・層位	形 種	石 材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考	写真 枚数
239	遺構外, II層	磨石目	安山岩	106	88	65	771		20
240	遺構外, II層	磨石目	硬砂岩	124	66	25	315		21
241	遺構外, II層	磨石目	凝灰質硬砂岩	167	88	54	418		20
242	遺構外, II層	磨石目	安山岩	132	124	41	738		21
243	遺構外, II層	磨石目	硬砂岩	166	98	42	791		21
244	遺構外, I層	磨石目	安山岩	161	83	52	500		20

第32図 遺構外出土遺物(9)



番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真 記録
245	遺構外、II層	磨石II	凝矽岩	92	76	35	289		21
246	遺構外、II層	磨石V	安山岩	(57)	87	47	296		21
247	遺構外、II層	磨石V	凝矽岩	(103)	95	50	671		21
248	遺構外、II層	磨石跡	凝灰質凝矽岩	83	76	23	206		21
249	遺構外、II層	磨石跡	安山岩	90	79	36	179		21
250	遺構外、I層	磨石	凝矽岩	(109)	92	43	606		21
251	遺構外、II層	礫石	粘板岩	140	58	27	400		21
252	遺構外、II層	礫石	粘板岩	95	37	9	72		21

第33図 遺構外出土遺物(10)

VI. まとめ

1. 遺構について

- (1) 本遺跡は、縄文時代早期・前期・後期の時期に当時の生活圏の一部として使用された。
- (2) 4棟の竪穴住居跡が検出されている。検出面・遺物の内容から次のように時期区分される。
第1・3・4号竪穴住居跡（地床炉・石囲い炉）—縄文時代後期前葉
第2竪穴住居跡（地床炉）—縄文時代前期前半
- (3) 縄文時代後期前葉には、竪穴住居跡の存在から居住域として使用されていた。ほぼこの時期と相前後して落し穴遺構が存在し、狩り場として使用された。また、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡の上位あるいは隣接した地域から土器埋設遺構が検出されており、竪穴住居跡が廃絶されてある一定期間を経て後、この空間は土器埋設遺構が占有する空間となった。
- (4) 土坑類は大きく、縄文時代前期・後期のものに区分される。構築・使用時期については竪穴住居とそうかけ離れた時期ではないと思われる。
- (5) フラスコ形の土坑が4基検出されている。埋土から多量の遺物が出土しており、人為的な投棄と考えられる。この類の土坑の用途については、貯蔵穴・墓塚説など多様な考え方があがるが、今回の調査ではこれらの説を積極的に支持する状況は確認されなかった。フラスコ形の土坑は、ある種の目的に使用された後内部が空の状態で廃絶されたものと思われる。
また、4基のうち2基のフラスコ形の土坑の底面には各1個ずつ副穴（小ピット）を伴ったものがある。小ピットの機能については、この種の土坑を墓塚に転用した際の施設とする説があるが、本遺跡ではこの小ピットに意識的に礫を埋め込んだ例が検出されており、これが何を意図するものなのか今後の類例の増加を待ちたい。

2. 遺物について

- (1) 第Ⅰ群とした土器は、縄文時代早期中葉に比定される土器群である。貝殻条痕文が施文されたa類とした土器は白浜式、間隔の広い貝殻腹縁圧痕文の施文されたb類とした土器は寺の沢式に相当する。c・d類とした貝殻腹縁連続波状圧痕文・押し引き文、ロッキングの手法が見られる土器は吹切沢式に相当すると思われる。
- (2) 次に、胎土に植物性繊維を含んだ第Ⅱ群土器について若干のまとめを行う。前項で述べたように第Ⅱ群土器としたものは第Ⅱ層を中心に出土している。調査区は、狭小な範囲でしかも層厚も平均20cmと薄層である。斜面上方からの土壌の移動による再堆積も少なからず考えられるが、第Ⅱ群土器はある一時期を形成した土器群が時間的に近い時期に併存した土器群と考えられる。個々の土器を取り上げるとそれぞれ型式名の付されるものもあるが、ここで

は第II群土器を一括した土器群として取り扱うこととする。現段階では、これに相応する型式名がないため周辺地域から類似した土器群を抽出し、その編年上の位置を明らかにしていく。

本遺跡の第II群とした土器の特徴として次の点があげられる。①量的に差異はあるが、胎土にすべて植物性繊維を含む。一般に少ないが、燃糸文・不整燃糸文が施文された土器は繊維の混入が多いが目立ち、必然的に器壁の厚さも厚い傾向にあり、焼成もあまり良好とはいえず脆いものが多い。これに比較し、縄文が施文された土器は焼成が良く硬質である。②上げ底風平底が1点あるが、主体をなすのは丸底～尖底をなす深鉢形土器である。③器表面にはすべて縄文・絡糸体による燃糸文が施文され、裏面に縄文・条痕をもつものはほとんどなくわずかに条痕文が施文された土器が1点あるにすぎない。④単節斜行縄文(R・L・R・0段多条)・複節斜行縄文・非結束の羽状縄文・綾絡文(横方向)・燃糸文(縦位・斜位・交差)により構成されている。⑤同じ燃りの縄を数本揃えて絡げた原体による燃糸文(G類の一部)を除くと、特殊な原体を使用したものはない。⑥文様帯を構成するものが若干あり、その際綾絡文が文様帯を区画する手法として使われている。また、縄文・燃糸文の原体の回転方向を変化させて文様帯表出を意識した手法もみられる。⑦絶対量としては少ないが、口唇部に原体の側面圧痕を施文したものが数点ある。口唇部は平坦に仕上げられるもの・丸みをもつものがみられ、特に綾絡文の見られる土器の口端は外側に突き出している。

断片資料ではあるが、以上のような特徴を持つ土器を出土する遺跡として岩手県内では、二戸市上里遺跡・中曾根II遺跡・沢内B遺跡・馬立I遺跡・大久保遺跡、浄法寺町沼久保遺跡・五庵II遺跡・飛鳥台地I遺跡、軽米町吹屋敷I b遺跡、滝沢村仏沢III遺跡・耳取遺跡・湯舟沢遺跡などがあげられる。北上川上流域・県北部に分布する傾向がある。ここでは、比較的類似資料を多く出土している遺跡を取り上げ比較検討を行うことにする。

二戸市上里遺跡では、①胎土にいずれも多量の繊維が混入している。②器表に縄文を付し、内面に縄文や条痕を付すものを含まない。③口唇や刺突や押圧等による刻みをもたない。④底部形態は尖底と平底がある等の特徴を第II群土器として位置付けている。更に、文様・施文技法の違いから1類単節縄文、2類結束羽条縄文、3類燃糸文、4類沈線文・押し引き沈線・列点文、5類地文は縄文・口唇部に綾絡文、6類不整燃糸文のち磨り消しに綾絡文、7類体部・口縁部にループ文というように7類に細分している。総体的に縄文時代前期初葉に位置付け、II群3類C種(長七谷地III群相当)→II群4類(春日町式、早稲田6類a・b、石川野遺跡のコンパス文相当)→II群1・2類(沢内遺跡I群B種相当)→II群3類A・B種(深郷田式に近似)→II群5・6類(円筒下層a式相当)という時間的推移を想定している。

同じく二戸市沢内B遺跡では、胎土に繊維が混入し体部に縄文が施文された一群を第I群I類B種として位置付けている。第I群B種は、単節・複節斜行縄文、僅少の燃糸文、羽条縄文(結束・非結束有り)、ピッタリ縄文などで構成されている。裏面に縄文・条痕を持たないことから、このグループの土器は表裏縄文土器・表縄文裏条痕文土器よりも新しい土器群と考えられている。

中曽根II遺跡からは、縄文時代早期～前期の遺構とともに良好な土器資料がえられている。縄文時代前期初頭に位置付けられる土器群として、第II群土器、第III群土器が設定されている。第II群土器とした土器は、丸底ないしは尖底の深鉢形土器である。器表面には、燃糸文・綾絡文・付加条文・縄文が施文され、これらが組み合わせられて文様帯を構成するものもある。円筒下層a式の直前かあるいは併行する可能性があることが指摘されている。第III群土器は、器表面に縄文、羽条縄文が施文された底部平底の一群である。羽条縄文では圧倒的に結束のものが多く、大木1式に併行する時期が与えられている。

浄法寺町に所在する沼久保遺跡では、地文として燃糸文が施文されている土器が比較的多く出土している(第I群a類)。特徴として、次の点が列挙される。①胎土にはすべて植物性繊維を含む。②平底のものも若干あるが主体を占めるのは平縁尖底深鉢形土器である。③地文として、器表面に縦走する燃糸文が施文される。裏面に、条痕を持つものもあるがそれは少数例である。④燃糸文施文の土器が主体を占めるが、これにつき多いのは綾絡文施文のものである。綾絡文施文の土器は、概して縄文・燃糸文とともに段状の文様帯を構成する場合が多い。⑤他に、付加条縄文・単節斜行縄文・結束羽状縄文・組紐回転文が少数例みられる。これらの土器群は縄文時代前期に属し該当型式名不明としながらも、a₁～a₃類土器は深部田式に、横方向に燃糸文が施文され裏面に条痕文が施文されたa₁類を大木2b式との関連で把握している。口縁部及び体部に横位の綾絡文が施文されたa₂類、平縁・平底で非結束の羽状縄文が施文され口縁部に不整綾絡文が施されたa₃類は、大木2式・円筒下層a式の近似が指摘されている。また、地文として燃糸文が多用されたり、口縁部に不整綾絡文が施文された同様の特徴を持つ土器は、町内の五座II遺跡でも出土している。

以上、本遺跡の第II群土器と関連を持つと思われる土器を出土する遺跡を概観してきた。これらの遺跡から出土している該当土器は、すべて縄文時代前期前半に位置付けられており本遺跡出土の当該土器もおおよそ同時期に相当すると思われる。更に、時間幅を狭小していく過程ではこの時期に普遍的に出土する斜行縄文の施文された土器はあまり重要視せず、類例が少なくても他遺跡の状況からその所属時期の明確なものを手懸かりとして本遺跡の第II群土器の位置付けを明らかにしていきたい。

・162のように、上げ底風平底の底部に体部と同様の施文がなされる手法は大木1式、芦野

第II群に存在する(名久井:1979、興野:1967・1984)。

- ・同じ燃りの縄を数本揃えて結げた原体による燃糸文(73~75・193・194)は、大木2 a式前後の土器群に共存する(名久井:1979)。大木2式では、特殊な燃糸文が多くなる(興野:1968)。

- ・第II群 e類とした横走する綾絡文で区画され段状の文様帯を構成する179は、沼久保遺跡第I群 a₃類に酷似する。沼久保遺跡では、当該土器を大木2式・円筒下層 a式との関連で把握している(酒井:1986)。

- ・内面に条痕をもたず、器表面に燃糸文が施文された中曾根II遺跡第155号住居跡出土の平縁尖底深鉢形土器、遺構外出土土器の脣部上半に綾絡文が巡り口縁部文様帯を形成している平縁尖底深鉢形土器は深郷田式との類似が指摘され大木2式前後に位置付けられている(熊谷:1983)。同様の土器は、沼久保遺跡第I群 a₁・a₃類、上里遺跡第II群 A・B種に相当し両遺跡ともこれらの土器群を深郷田式に近似するものと把握している(酒井:1986、高橋:1983)。ただし、本遺跡では口縁部に絡糸体瓦痕文を施文した例は出土していないが口脣部に原体の側面瓦痕を施したものが数例みられる。このような例は、芦野第II群土器にみられる(名久井:1971)。

- ・器表面に燃糸文、裏面に条痕文が施文された平縁尖底深鉢形土器の181は、沼久保遺跡 a₁類に近似しており沼久保遺跡では深郷田式との関連で把握されている。また、沼久保遺跡の第I群 a₁類は底部平底の形態をなすものであり、器形の面では大きく異なるが土器の内外面の施文技法では類似しており、大木2 b式との関連で把握されている(酒井:1986)。最も酷似するのは、江坂氏が石神遺跡の報文の中で深郷田式土器として紹介している、器表面燃糸文裏面条痕無しの平縁尖底深鉢形土器である(江坂:1970)。しかし、従来から深郷田式土器は器表面燃糸文裏面条痕文、平縁平底深鉢形土器を総称しており、この点では本遺跡出土の181などは深郷田式の部類から除外されるものであろう。その後、このような土器は芦野第II群にきわめて類似し深郷田式の直前に位置付けられるものと再評価されている(渡部:1970、村越:1974)。

- ・縄以外の施文具は使用していない。

- ・大木1式では非結束の羽状縄文が主体であるが、大木2式では羽状縄文それ自体少ないが結束のものが見られるようになる。

- ・大木1式のメルクマルであるループ文、大木2式のメルクマルであるS字状連鎖沈文は一切出土していない。

- ・本遺跡で、第II群土器の主体をなすのは、器表面に縄文・燃糸文が施文され裏面に条痕を持たない平縁尖底丸底深鉢形土器である。

以上のことから本遺跡のⅡ群土器は、個々には芦野Ⅱ群土器・深郷田式・大木1～2式・円筒下層a式の特徴を持ちながらも、総体的には熊谷編年のⅢ期の終わりからⅣ期にかけての時期(熊谷:1983)、沼久保遺跡第Ⅰ群a類・中曽根Ⅱ遺跡Ⅱ群・上里遺跡Ⅱ群3類と沢内B遺跡Ⅰ群1類B種の間に位置付けられるものと思われる。

- (3) 本遺跡でⅢ群土器としたものは、第3号・4号竪穴住居跡と第55・58・59号土坑から主に出土している。器種としては、深鉢形土器が主体を占め鉢形土器と壺形土器が少数みられる。隆帯・貼付文・沈線文の多用・磨消縄文などの文様要素の特徴から、これらの土器群は成田氏編年の前十腰内Ⅰ式・十腰内Ⅰa式に相当するものを含み(成田:1981)、概ね縄文時代後期前葉に位置付けられるものと思われる。
- (4) 本遺跡から、所謂「切断壺形土器」・「切断蓋付土器」とよばれる土器が2個体分出土している。第3号竪穴住居跡、第55号土坑の埋土から各1点ずつ出土している。いずれも破片資料のためその全容は不明であるが、第3号竪穴住居跡出土の切断土器は平らな切断面を示さずV字状の切断面を残すものである。これらの土器は、時期的には縄文時代後期前葉に属するものである。当該土器の特異性・分布・用途等については既に指摘されている通りである(阿部:1985、成田:1986)。その後、本県でも県北部を中心に類例を増し二戸市青ノ久保・馬立Ⅰ・馬立Ⅱ、浄法寺町飛鳥台Ⅰ、軽米町大日向Ⅱ、久慈市平沢Ⅰ、大迫町立石の各遺跡から出土している。

引用・参考文献

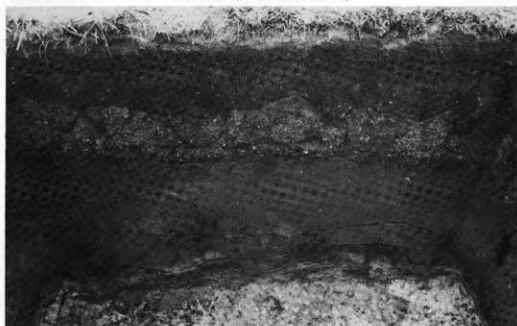
- 青森県教育委員会(1981):『鷹架遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 阿部芳郎(1985):『持ち運ばれる土器』季刊考古学Na12, 雄山閣 p.51-54
- 岩手県埋蔵文化財センター(1982):『川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第26集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1982):『田代・石神田遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第41集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『伊保内Ⅰa・Ⅰb遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第53集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第59集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『滝谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第49集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第50集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『臥屋敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第63集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1983):『道地Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第64集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1984):『根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第78集
- 岩手県埋蔵文化財センター(1984):『江刺家遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第70集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1985):『五能Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第94集

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第118集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第120集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『大久保・西久保遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第121集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第122集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第123集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第125集
- 江坂輝弥編（1970）：『石神遺跡』ニュー・サイエンス社
- 興野義一（1967）：『大木式土器理解のために（Ⅰ）』考古学ジャーナルNo13 ニューサイエンス社 p 16-18
- 興野義一（1968）：『大木式土器理解のために（Ⅱ）』考古学ジャーナルNo16 ニューサイエンス社 p 22-25
- 興野義一（1984）：『大木式土器について』『宮城の研究Ⅰ』清文堂 p 173-190
- 草間俊一（1961）：『岩手県九戸郡田代遺跡』日本考古学年報No9 日本考古学協会
- 草間俊一（1965）：『岩手県九戸郡妻神遺跡』日本考古学年報No13 日本考古学協会
- 熊谷常正（1983）：『岩手県における縄文時代前期土器群の成立』岩手県立博物館研究報告第1号 p 45-65
- 熊谷常正（1989）：『岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について』第4回縄文文化検討会シンポジウム資料
- 酒井宗孝（1986）：『沼久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書集第109集
- 関 豊（1981）：『中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
- 高橋与右ヰ門（1980）：『沢内B遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書集第7集
- 高橋与右ヰ門（1983）：『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書集第55集
- 滝沢村教育委員会（1986）：『湯奇沢遺跡』滝沢村文化財調査報告書第2集
- 滝沢村教育委員会（1986）：『耳取遺跡』滝沢村文化財調査報告書第3集
- 滝沢村教育委員会（1987）：『仏沢Ⅲ遺跡』滝沢村文化財調査報告書第5集
- 名久井文明（1971）：『青森県芦野遺跡の土器群について』考古学雑誌57-2 日本考古学会 p 1-25
- 名久井文明（1979）：『北日本縄文時代早期編年に関する一試考（Ⅱ）』考古学雑誌65-1 日本考古学会 p 1-16
- 名久井文明（1982）：『貝殻文尖底土器』縄文文化の研究3 雄山閣 p 85-95
- 成田滋彦（1981）：『青森県の土器』縄文文化の研究4 雄山閣 p 123-132
- 成田滋彦（1986）：『切断蓋付土器考』弘前大学考古学研究No.3 p 19-35
- 村越 潔（1974）：『円筒土器文化』雄山閣 p 52-62
- 渡部兼編（1970）：書評『石神遺跡』考古学ジャーナルNo50 ニューサイエンス社 p 28

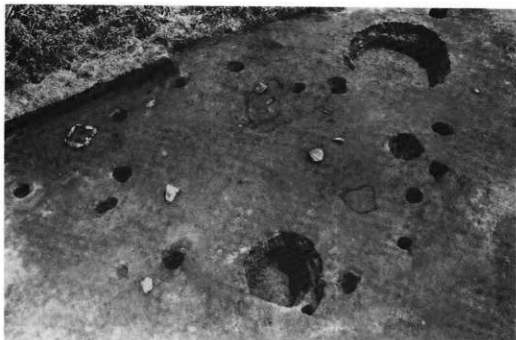
写 真 图 版



調査区（対岸の葉の木沢遺跡から）



基本土層



第1・2号竖穴住居跡平面



第1号竖穴住居跡炉平面



第1号竖穴住居跡炉断面



第2号竖穴住居跡炉平面



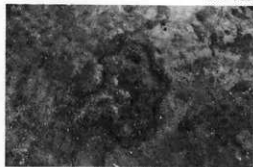
第2号竖穴住居跡炉断面



第3号竖穴住居跡平面



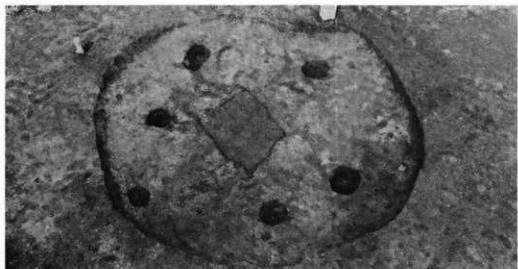
第3号竖穴住居跡断面



第3号竖穴住居跡炉平面



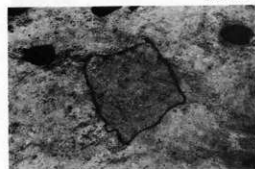
第3号竖穴住居跡炉断面



第4号竖穴住居跡平面



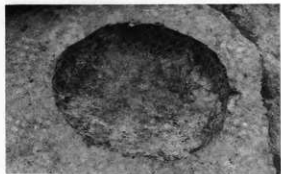
第4号竖穴住居跡断面



第4号竖穴住居跡炉平面



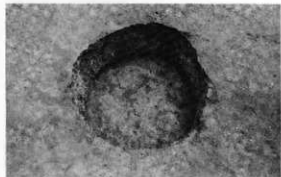
第4号竖穴住居跡炉断面



51号土坑平面



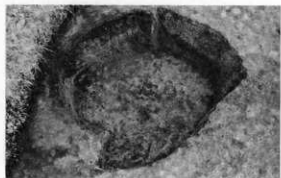
51号土坑断面



52号土坑平面



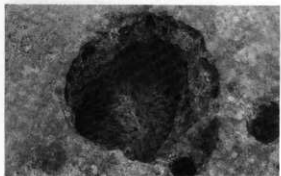
52号土坑断面



53号土坑平面



53号土坑断面

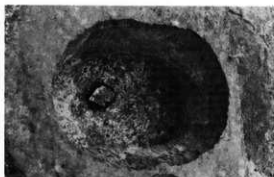


54号土坑平面



54号土坑断面

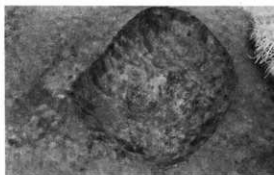
写真图版 5 第51·52·53·54号土坑



58号·55号土坑平面



55号土坑断面



56号土坑平面



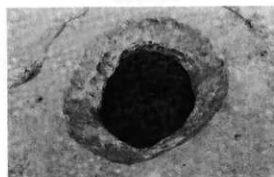
56号土坑断面



57号土坑断面



57号土坑平面

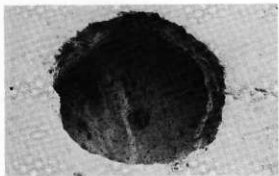


60号土坑平面

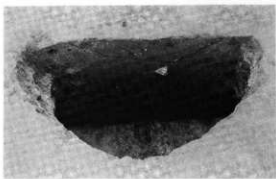


60号土坑断面

写真图版 6 第55·56·57·58·60号土坑



59号土坑平面



59号土坑断面



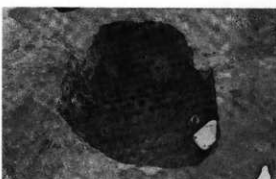
59号土坑副穴平面



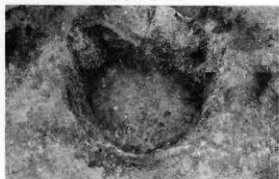
59号土坑副穴断面



61号土坑平面



62号土坑平面

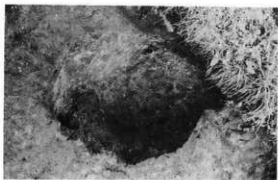


63号土坑平面



63号土坑断面

写真图版7 第59·61·62·63号土坑



64号土坑平面



64号土坑断面



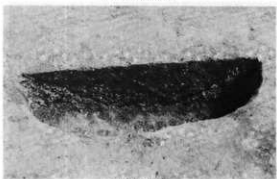
65号土坑平面



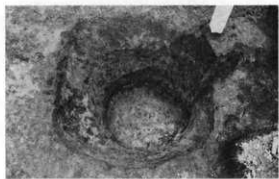
65号土坑断面



66号土坑平面



66号土坑断面



67号土坑平面



67号土坑断面

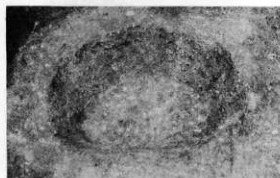
写真图版 8 第64·65·66·67号土坑



68号土坑平面



68号土坑断面



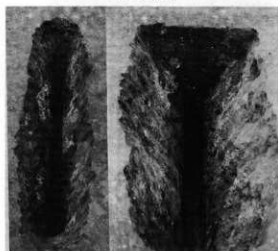
69号土坑平面



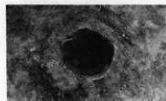
69号土坑断面



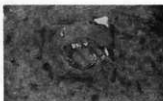
101号落とし穴遺構 平面・断面



102号落とし穴遺構 平面・断面



第1号土器埋設遺構平面



第2号土器埋設遺構平面



第2号埋設土器遺構断面

写真図版9 第68・69号土坑・落とし穴遺構・土器埋設遺構



18



20



97



84

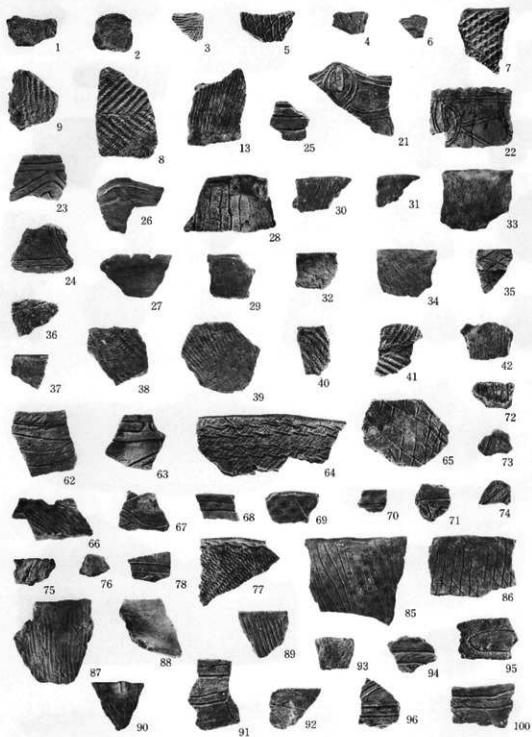


79



98

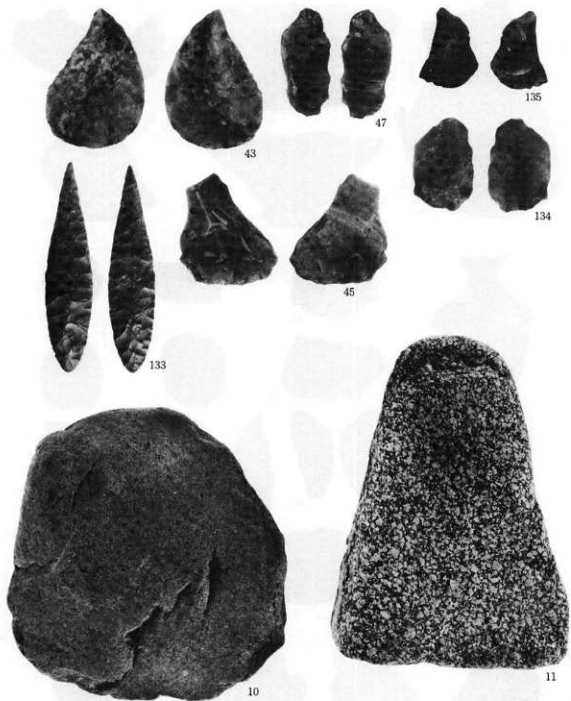
写真図版10 遺構内出土遺物(1)



写真図版11 遺構内出土遺物(2)



写真図版12 遺構内出土遺物(3)



写真図版14 遺構内出土遺物(5)



57



60



58



138



59



137

写真図版15 遺構内出土遺物(6)



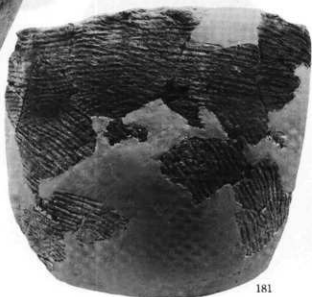
140



139

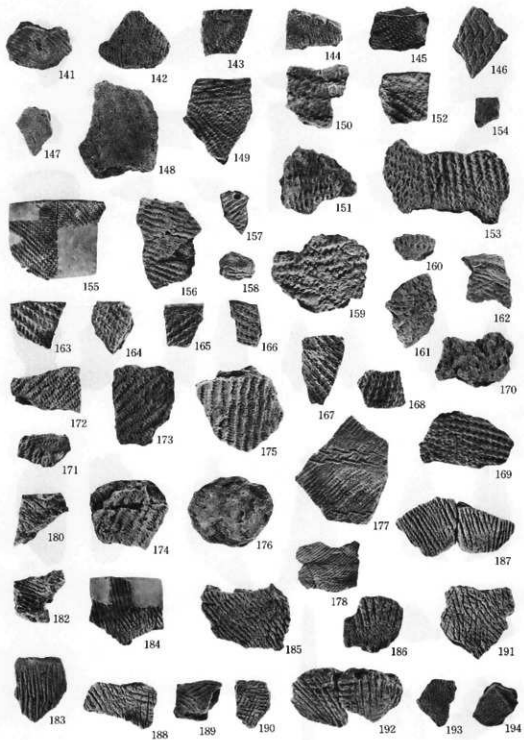


179

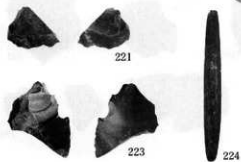
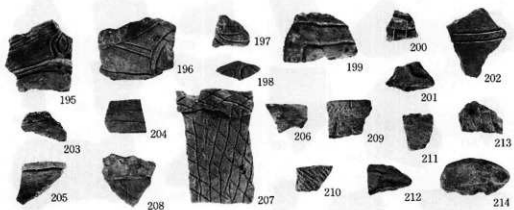


181

写真図版16 遺構内出土遺物(7)・遺構外出土遺物(1)



写真図版17 遺構外出土遺物(2)



写真図版18 遺構外出土遺物(3)



225



226



227



228



229



230



232



231



233

写真図版19 遺構外出土遺物(4)



234



235



236



237



239



238

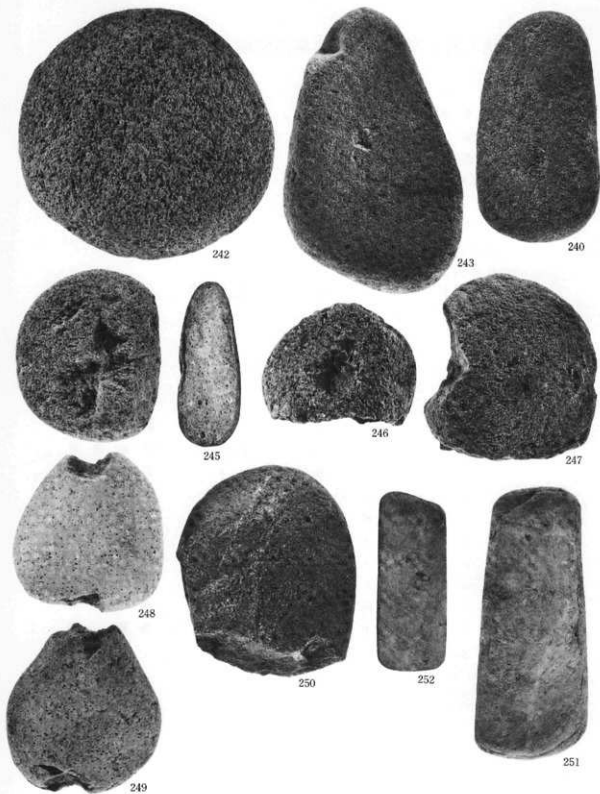


244



241

写真図版20 遺構外出土遺物(5)



写真図版21 遺構外出土遺物(6)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二		
副 所 長	鎌 田 良 悦		
[管 理 課]			
管理課長(兼)	鎌 田 良 悦	嘱 託	吉 田 一 男
課長補佐	伊 藤 吉 郎	兼 技 士 員	佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広		
[調 査 課]			
調 査 課 長	昆 野 靖		
課長補佐	佐々木 嘉直		
主任文化財 専門調査員	小 田 野 哲 憲	文 化 財 專 門 調 査 員	遠 藤 修
〃	三 浦 謙 一	〃	斎 藤 邦 雄
〃	工 藤 利 幸	〃	高 橋 義 介
〃	高橋 与右エ門	〃	佐々木 信 一
〃	平 井 進	〃	小 原 眞 一
〃	中 村 良 一	〃	村 上 修
〃	中 川 重 紀	〃	酒 井 宗 孝
文 化 財 專 門 調 査 員	藤 村 敏 男	期 限 付 專 門 調 査 員	菊 地 達 哉
〃	斎 藤 實	〃	相 原 伸 裕
〃	光 井 文 行	〃	及 川 靖 世
〃	佐 瀬 隆	〃	女 鹿 文 雄
〃	斎 藤 博 司	〃	濱 田 宏 宏
〃	東海林 隆 幹	〃	及 川 雅 之
〃	佐々木 弘	〃	星 下 宏 堅
〃	川 村 均	〃	森 高 橋
〃	鈴 木 貞 行	〃	
[資 料 課]			
資料課長	高 橋 薫		
主任文化財 専門調査員	田 鎖 寿 夫		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第139集

管波 I 遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年7月25日

発行 平成元年7月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196)38-9001・9002

印刷 (株) 杜 陵 印 刷

〒020-01 岩手県盛岡市厨川4丁目2番6号

TEL (0196)41-8000代

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1989